

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Ⅱ.1.1. 場面1(1)：ぶつかられたときの応答

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 生越, 直樹, 水谷, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002332

Ⅱ. 1. 1. 場面 1(1) : ぶつかられたときの応答

生越 直樹

Ⅱ. 1. 1. 0. はじめに

Ⅱ. 1. 1. 1. 場面 1 の被調査者について

Ⅱ. 1. 1. 1. 1. 性別・年齢

Ⅱ. 1. 1. 1. 2. 現住国滞在年数

Ⅱ. 1. 1. 1. 3. 接触度

Ⅱ. 1. 1. 1. 4. 職業

Ⅱ. 1. 1. 2. 「場面 1」のねらい

Ⅱ. 1. 1. 3. ぶつかった相手が謝ったときどうするか（ビデオなし）

Ⅱ. 1. 1. 3. 1. 日本での応答

Ⅱ. 1. 1. 3. 2. 対照国（現住国／母国）での応答

Ⅱ. 1. 1. 3. 3. 日本人から見た現住国の人の応答

Ⅱ. 1. 1. 3. 4. 在日外国人から見た日本人の応答

Ⅱ. 1. 1. 3. 5. 母国と現住国の差（在外日本人調査）

Ⅱ. 1. 1. 3. 6. 母国と現住国の差（在日外国人調査）

Ⅱ. 1. 1. 3. 7. 何を気にしながら応答するか

Ⅱ. 1. 1. 4. ぶつかったときどちらから声をかけるか（ビデオ見て）

Ⅱ. 1. 1. 4. 1. 日本での出来事なら

Ⅱ. 1. 1. 4. 2. 対照国（現住国／母国）での出来事なら

Ⅱ. 1. 1. 5. ぶつかられた側の行動について（ビデオ見て）

Ⅱ. 1. 1. 5. 1. ぶつかられた人は何と言ったか、回答の手がかりは

Ⅱ. 1. 1. 5. 2. 自分なら何と言うか

Ⅱ. 1. 1. 6. ぶつかられた側の抗議行動について（ビデオ見て）

Ⅱ. 1. 1. 6. 1. 話し方は適当だと思うか

Ⅱ. 1. 1. 6. 2. 言葉の量は適当か

Ⅱ. 1. 1. 6. 3. 自分がこう言われたらどう思うか

Ⅱ. 1. 1. 6. 4. 同じ場面が対照国（現住国／母国）で起こったら

Ⅱ. 1. 1. 7. 身体接触の受け止め方

Ⅱ. 1. 1. 7. 1. 対照国（現住国／母国）と日本で違いがあるか

Ⅱ. 1. 1. 8. まとめと残された問題

Ⅱ.1.1.0. はじめに

この章(Ⅱ.1.1.)と次の章(Ⅱ.1.2.)では、今回の取り上げた6つの場面のうち、通路でのぶつかり場面を扱った「場面1」の結果について分析する。「場面1」は通路でぶつかった2人の人物の抗議行動と謝罪行動に焦点を当てたもので、被調査者には2人の行動に対する感想やその場での自分の行動を尋ねた。「場面1」は質問数が多いため、本報告書では2つの章に分けて分析を行うことにする。抗議行動についてはこの章で生越が、謝罪行動については次の章で早田がそれぞれ分析を行う。なお、被調査者に関する分析はこの章でまとめて行い、次の章では省略する。

Ⅱ.1.1.1. 場面1の被調査者について

まず、調査を行った被調査者の属性について、その全体的な傾向を示しておく。なお、ここで示す被調査者についての数字は、「場面1」の被調査者に限定したものである。今回の調査では合わせて6つの場面について面接調査を行っているが、一度の面接調査で6つの場面すべてを調査したわけではない。6つの場面全体では量が多すぎて一度に調査することは不可能であるうえ、限られた出張期間内で同一の人に何度も調査を依頼するのは困難であった。

そのため、2～3場面ずつに分けて調査を行うことにし、被調査者もそのつど顔ぶれが変わった。したがって、被調査者は場面ごとに少しずつ異なり、その属性も多少変動がある。しかしながら、在伯日本人など在外日本人の各グループ、在日ブラジル人などの在日外国人の各グループおよび国内日本人に関して言えば、場面ごとの被調査者の属性にそれほど大きな違いはない。場面ごとの被調査者の属性については、本報告書の「Ⅲ. 被調査者の属性」にまとめて示してあるので、参照されたい。

以下、「場面1」の被調査者の属性について、詳しく述べていく。

Ⅱ.1.1.1.1. 性別・年齢

被調査者の性別・年代・現住国滞在年数については、「Ⅲ. 被調査者の属性」に表とグラフが示してあるので、詳しい数字はそれを参照されたい。ここでは、特徴的な点を述べる。まず、性別に関しては、日本人の場合女性が多く（男 105, 女 154 人）、外国人は男女ほぼ同じである（男 77 女 79）。グループ別に見ると、在仏日本人、在米日本人、国内日本人では女性が男性の約2倍になっている。

年齢に関しては、グループによってばらつきがある。在伯日本人は40代以上の人が多く、他のグループとかなり異なる。在韓・在越日本人、在日ブラジル人・アメリカ人・韓国人・ベトナム人は、30代以下の若い人が多い。(注1) 全体的に見ると、在外日本人では各グループ間の差がかなりあること、在日外国人ではグループ間の差はそれほど大きくないこと、在日外国人の方が在外日本人より若いこと、以上の3点を指摘することができる。

Ⅱ.1.1.1.2. 現住国滞在年数

現住国滞在年数に関しては、3年未満の短期滞在者が多いグループと3年以上の長期滞在者が多いグループに分かれる。日本人の場合、在伯・在仏・在米日本人は長期の人が多

く、在韓・在越日本人は短期の人が多い。特に在伯日本人は10年以上滞在している人が7割に達しており、年齢が高い点も合わせると、他の日本人グループと異なる点が多いと言える。日本人グループ全体では、いわゆる欧米圏にいる人は長期、アジア圏にいる人は短期という傾向があり、要因分析の際には注意が必要である。一方、在日外国人の場合は、ブラジル人・フランス人・韓国人は比較的長期滞在が多く、アメリカ人、ベトナム人は短期が多い。つまり、在越日本人、在日ベトナム人はともに年齢が若く、短期滞在者が多いという特徴を持っている。

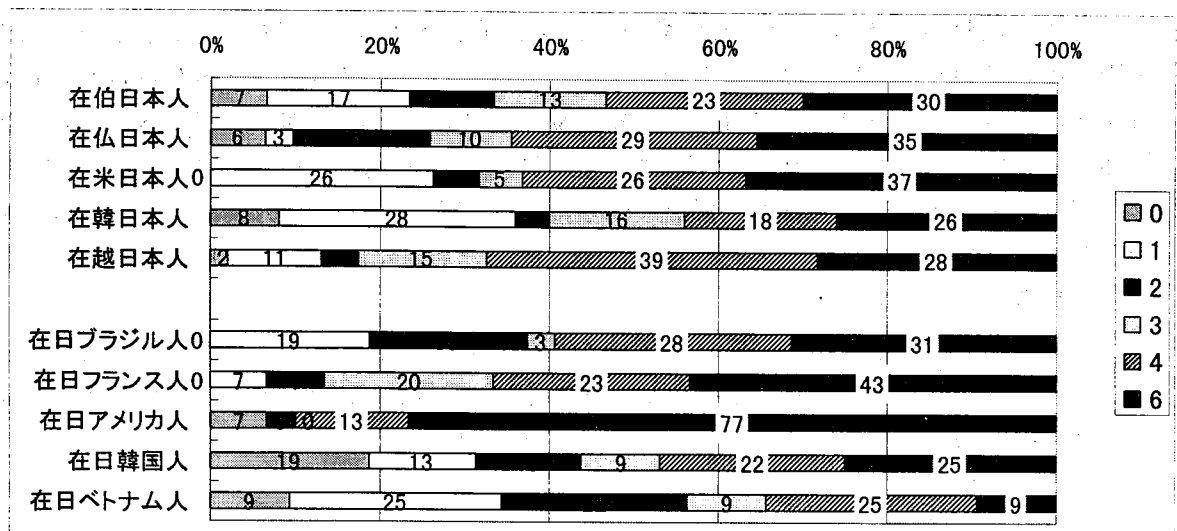
今回の調査では、各グループごとに年齢や滞在年数などを均一にすることはできなかった。さらに、滞在年数と地域、滞在年数と年齢など、複数の要素が重なっている場合もあり、結果の要因分析では、この点に十分留意する必要がある。

Ⅱ.1.1.1.3. 接触度

今回の調査では、被調査者に「仕事の場面」および「仕事以外の場面」で現住国の人とどの程度の接触があるかを尋ねた。回答は「多い、それほど多くない、ほとんどない」の3つから選択してもらった。図表Ⅱ-1-1a、Ⅱ-1-1bは、その回答を「多い」は3点、「それほど多くない」を1点、「ほとんどない」を0点とし、現住国の人との接触度を示したものである。3点以上の方は「仕事の場面」あるいは「仕事以外の場面」で滞在国の人とかなり接触をしている人であり、2点以下は滞在国の人との接触が少ない人と言える。図表を見ると、多くのグループでは2点以下の人が3割から4割程度いる。在越日本人、在日フランス人・アメリカ人では全体的に接触度が高いこと、逆に在日ベトナム人では接触度が低いことが目に付く。

図表Ⅱ-1-1a 各グループの現住国での接触度（数字は人数）

接触点	在伯 日本人	在仏 日本人	在米 日本人	在韓 日本人	在越 日本人	在日 ブラジル人	在日フ ランス人	在日 アメリカ人	在日 韓国人	在日 ベトナム人	被調査 者数
0点	2	2	0	4	1	0	0	2	6	3	20
1点	5	1	10	14	5	6	2	0	4	8	55
2点	3	5	2	2	2	6	2	1	4	7	34
3点	4	3	2	8	7	1	6	0	3	3	37
4点	7	9	10	9	18	9	7	4	7	8	88
6点	9	11	14	13	13	10	13	23	8	3	117
総計	30	31	38	50	46	32	30	30	32	32	351



図表Ⅱ-1-1b 各グループの現住国での接触度(数字は各項目の被調査者数に対する割合%)

Ⅱ.1.1.1.4. 職業

次に被調査者の職業について述べておく。各グループ別に示したのが、図表Ⅱ-1-2である。在外日本人の教師というのは主として日本語教師である。在外日本人の特徴としては、在伯日本人で会社員が多く、教師、学生がいないこと、在越日本人で主婦が少ないことが挙げられる。在越日本人の接触度が高かったのは、現住国の人と接触が多い教師や学生が多く、主婦が少ないためであろう。在日外国人では、ブラジル人は会社員、フランス人、アメリカ人は教師、韓国人、ベトナム人は学生が多い。アメリカ人の教師の多くは各都道府県の中学で英語を教えている教師である。

図表Ⅱ-1-2 各グループ別の職業(数字は人数)

職業分類	在伯日本人	在仏日本人	在米日本人	在韓日本人	在越日本人	国内日本人	在日ブラジル人	在日フランス人	在日アメリカ人	在日韓国人	在日ベトナム人	被調査者数
会社員	15	1	12	11	9	13	19	7	6	6	0	99
公務員	0	7	1	5	0	7	1	0	1	0	0	22
専門職	4	0	4	1	2	7	1	2	3	6	1	31
教職	0	9	7	10	16	2	3	15	20	2	8	92
学生	0	9	1	4	12	5	3	4	0	14	20	72
自営	2	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	13
主婦	7	4	12	19	5	14	3	2	0	4	1	71
その他	1	1	1	0	1	3	1	0	0	0	2	10
無職	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	4
不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総計	30	31	38	50	46	64	32	30	30	32	32	415

被調査者の年齢や滞在年数、職業の偏りは、ある程度効率よく被調査者を確保しようとしたためであり、今回調査した人たちが各グループの平均的な人たちというわけではない。そのことに留意しつつも、今回の調査結果と被調査者の属性の関係についても適宜触れていきたい。

II.1.1.2. 「場面1」のねらい

個々の質問について分析していく前に、「場面1」の状況について説明しておく。「場面1」では、知らない人同士が道ですれ違うときにちょっとぶつかるという状況を取り上げた。被調査者も経験がありそうな状況で、相手に対してその場だけの配慮を示せばよい単純な状況であるから、回答、分析とも比較的しやすいものと思われた。調査ではその状況において、ぶつかった人とぶつかられた人の行動、特にその際のことばづかいがどのようになるのかを探ろうとした。今回の調査の特徴の一つは、母国と現住国での行動を両方とも尋ねたことである。両方尋ねることにより、被調査者が両国の間に何らかの違いがあると感じているのか否か、さらには、違いがあると感じているとしても、それが本当に国民性の違いによるのかを調べようとした。

「場面1」の調査はビデオなしで質問する前半部分と、ビデオを見ながら質問する後半部分に分かれている。ビデオなしの前半部分では、道で知らない人にぶつかったときどのような言葉で謝るのか、それに対してどういう反応をするのかを、母国と現住国に分けて尋ねた。

ビデオを用いた後半部分では、まず、ぶつかられた方が先に抗議をし、それに対してぶつかった方が謝るという場面をビデオで見せ、ぶつかった方、ぶつかられた方に対して被調査者がどういう評価をするのか、自分ならどうするか、母国と現住国では違いがあるか、などを尋ねた（ビデオのSCRIPT、場面のイラストは別冊の『資料編』p.1を参照のこと）。最後に、全般的な質問として、他人との身体接触に関する母国と現住国との違い、それにまつわる具体的な経験を尋ねた（質問の意図については、本報告書のI.2.杉戸執筆部分も参照のこと）。

なお、ビデオなしの前半とビデオありの後半は関連性を持ちつつも、状況設定に若干の違いがある。ビデオなしの前半では、ぶつかった方が先に謝る設定になっているのに対し、ビデオで見せた場面は、ぶつかられた方が先に抗議し、そののちにぶつかった方が謝罪している。つまり、ぶつかられた側の行動がビデオなしで尋ねた設定とビデオでの設定では異なっている。質問内容も、一般的な状況設定の前半部分では、もっぱら被調査者自身あるいは現住国の人の行動について質問しているのに対し、一般的とはいえない状況設定である後半部分では、ビデオに出てくる人の行動を見てどう思ったかを中心に質問している。言い換えると、前半は言語行動を中心に、後半は言語行動に対する見方・意識を中心に質問している。したがって、本章では前半部分と後半部分を基本的には分けて述べていくことにする。

II.1.1.3. ぶつかった相手が謝ったときどうするか（ビデオなし）

まず、ビデオなしで行った前半部分の結果を見ていく。上で述べたように、前半部分ではぶつかった相手が謝ったときの行動について尋ねた。以下、調査票の内容を示す。調査では、調査員がこの文章を口頭で述べ、被調査者は自由に回答するか、あらかじめ渡しておいたリストを見ながら回答した。調査票に「リスト」とあれば、そのリストで回答を求めている。なお、日本人を対象とする調査と外国人を対象とする調査では質問の仕方が若干異なる。質問文の一部が異なる部分は、「日本人調査／外国人調査」という形で示した。また、質問文全体、あるいはリストが異なる場合は、＜日本人調査＞＜外国人調査＞と明記して示した。

1.0.1. [日本・東京] / [母国] で、たとえばビルの廊下を歩いていて、まったく見ず知らずの人とすれちがう時のことを思い浮べてください。ご自分（あなた）が急いでいたせいで、相手に体をちょっとだけですがぶつけてしまいました。そんな時、ふつうどんな風に言葉をかけますか？ きまった身振りはありますか？ 表情は？

（この 1.0.1 の質問はこの章では扱わない）

1.0.3. 今度は逆にあなたがぶつかられたときを考えて下さい。ぶつかってきた相手から謝られたとしたら、どう言葉を返しますか？ まず、[日本・東京] / [母国] だったらいかがでしょうか。

<日本人調査> ①とくに、何もしない。

- リスト ②会釈するくらいで、言葉には出さない。
③「いいえ」くらいの簡単な言葉を返す。
④「いいえ、どういたしまして」など、少し丁寧な言葉を返す。
⑤その他

<外国人調査> ①とくに、何もしない。

- リスト ②言葉には出さない。すこし頭を下げるくらい。
③かんたんな言葉を返す。日本語でいえば「いいえ」くらい。
④すこしていねいな言葉を返す。「いいえ、どういたしまして」など。
⑤その他

SUB:ことばの返し方を選ぶとしたら、どんなことを気にして選ぶと思いますか？

1.0.4. こんどは[この国] / 日本の人からぶつかられたとしたらどうでしょう？

相手が謝ってきたらどう言葉を返すか？ということですが。

リスト 同上

SUB:ことばの返し方を選ぶとしたら、どんなことを気にして選ぶと思いますか？

II.1.1.3.1. 日本での応答

上に示した調査票のように今回の調査では、ぶつかった相手が謝ったときの応答について、日本での場合と日本以外の国（ここでは対照国と呼ぶ）での場合をそれぞれ尋ねている。ここでは日本で起こった場合の応答について、各グループの回答を分析してみる。まず、日本人の被調査者の回答([1.0.3.日])および外国人の回答([1.0.4.外])を図表Ⅱ-1-3a, Ⅱ-1-3b に示す。①～⑤は回答リストに出ている項目番号に対応しており、図表では以下のように表示する。

①とくに、何もしない。 → 「①なし」

②会釈するくらいで、言葉には出さない。

言葉には出さない。すこし頭を下げるくらい。 → 「②会釈」

③「いいえ」くらいの簡単な言葉を返す。

かんたんな言葉を返す。日本語でいえば「いいえ」くらい。 → 「③簡単」

④「いいえ、どういたしまして」など、少し丁寧な言葉を返す。

すこしていねいな言葉を返す。「いいえ、どういたしまして」など。 → 「④丁寧」

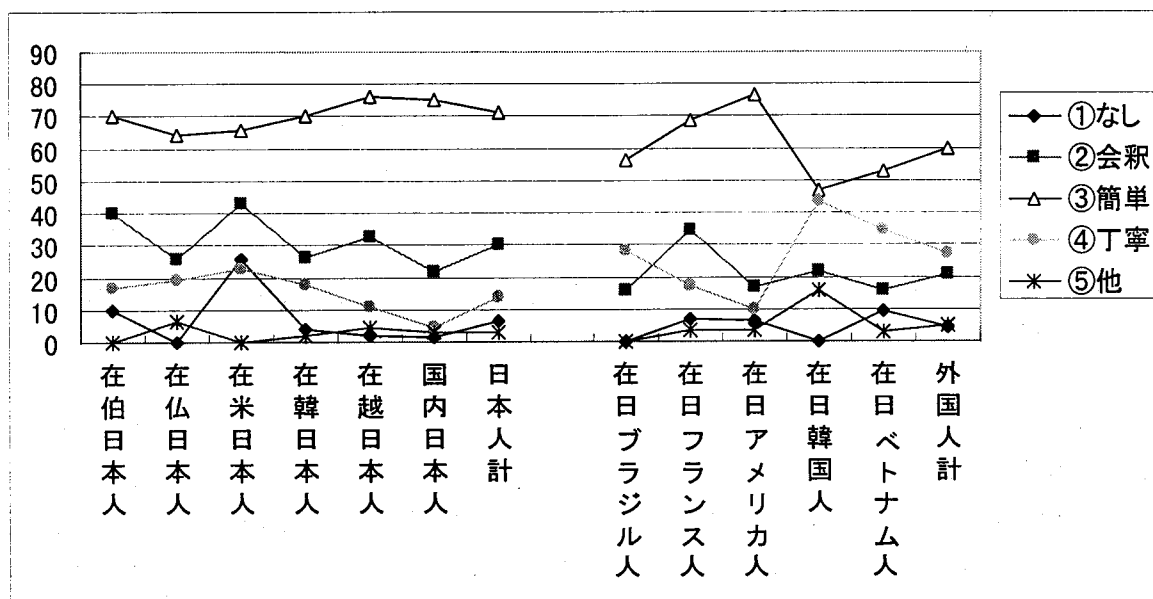
⑤その他 → 「⑤他」

回答の中には「②か③」という回答もあり、その場合は②③の複数回答とした。また、

「②と③の中間」という回答もあったが、これも②③の複数回答として処理している。厳密な統計的処理としては問題があるだろうが、ここではおよその傾向を示すためにこのような方法を使った。無調査は、調査しなかった人及び回答が記録されていない人を指す。(注2) なお、本文または図表で示す[]内の数字は調査票の質問番号であり、同一番号でも日本人調査と外国人調査で質問内容が異なる場合、番号の後に「日」及び「外」を付加した。

図表Ⅱ-1-3a 日本での応答(複数回答あり)(数字は人数, ()内は回答総数に対する回答者の割合%)([1.0.3.日,1.0.4.外])

	① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	回答 総 数	無調査	被調査 者数
在伯日本人	3	12	21	5	0	30	0	30
在仏日本人	0	8	20	6	2	31	0	31
在米日本人	9	15	23	8	0	35	3	38
在韓日本人	2	13	35	9	1	50	0	50
在越日本人	1	15	35	5	2	46	0	46
国内日本人	1	14	48	3	2	64	0	64
日本人計	16 (6.3)	77 (30.1)	182 (71.1)	36 (14.1)	7 (2.7)	256 (100.3)	3	259
在日ブラジル人	0	5	18	9	0	32	0	32
在日フランス人	2	10	20	5	1	29	1	30
在日アメリカ人	2	5	23	3	1	30	0	30
在日韓国人	0	7	15	14	5	32	0	32
在日ベトナム人	3	5	17	11	1	32	0	32
外国人計	7 (4.5)	32 (20.6)	93 (59.6)	42 (27.1)	8 (5.2)	155 (100.0)	1	156

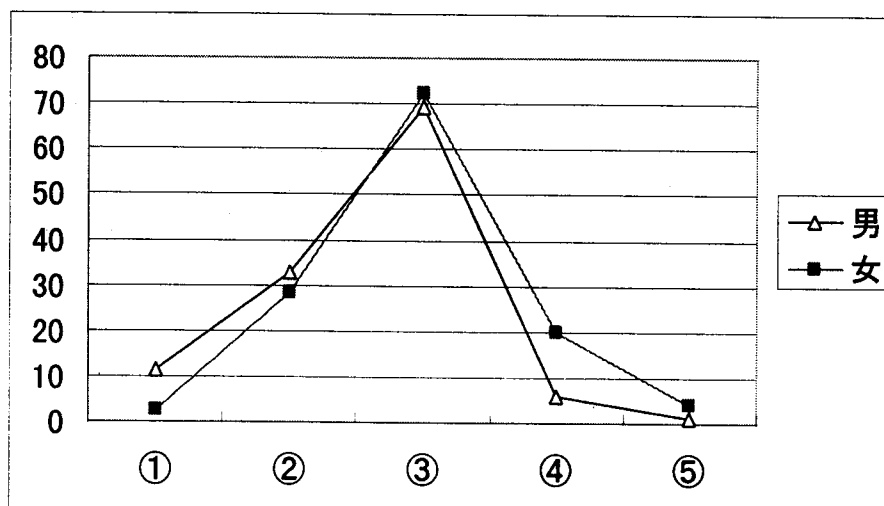


図表Ⅱ-1-3b 日本での応答(複数回答あり)(回答総数に対する各回答者の割合%)([1.0.3.日,1.0.4.外])(注3)

日本人については、上の図表を見てわかるように、現住国による差や国内日本人と在外日本人の差はほとんどない。異なる点としては、在米日本人に「①なし」の回答が多いくらいである。また、年代による差も見られなかった。日本人の回答で最も多いのは「③簡単」であり（182名）、2番目の「②会釈」（77名）や3番目の「④丁寧」（36名）に比べ圧倒的に多い。回答のうち、①と④については、性別による差が見られた。日本人の性別ごとの数字を図表Ⅱ-1-4a、Ⅱ-1-4bに示す。男性は①が多く、女性は④が多い。つまり、女性の方が丁寧な応答ををすると言える。これは、尾崎(1999)の調査結果とも一致する。尾崎調査では、このほか、④の回答数が③と同じくらいになっている。今回の調査では④が少なく、その理由については今のところ不明である。

図表Ⅱ-1-4a 日本での応答（日本人被調査者の性別との関係）（複数回答あり）（数字は人数，（ ）内は被調査者数に対する回答者の割合％）

	①なし	②会釈	③簡単	④丁寧	⑤他	回答総数
日本人男	12(11.5)	34(32.7)	72(69.2)	6(5.8)	1(1.0)	104(100.2)
日本人女	4(2.6)	43(28.3)	110(72.4)	30(19.7)	6(3.9)	152(99.9)
計	16(6.3)	77(30.1)	182(71.1)	36(14.1)	7(2.7)	256(100.3)

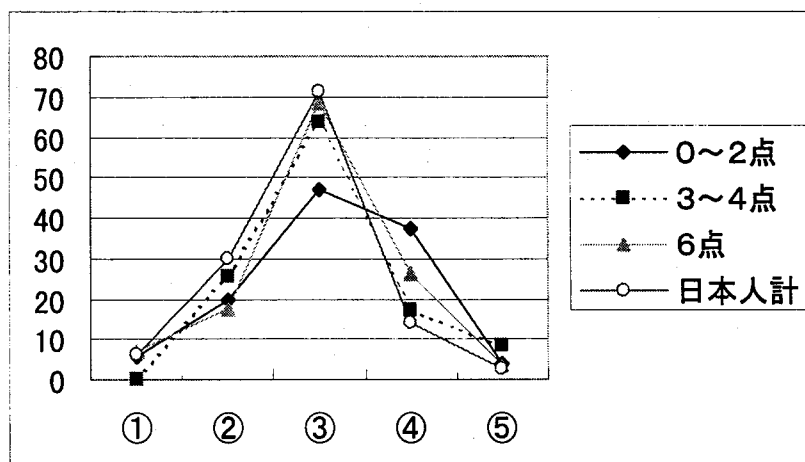


図表Ⅱ-1-4b 日本での応答（日本人被調査者の性別との関係）（複数回答あり）（数値は回答総数に対する各回答者の割合％）

一方、外国人の場合は、1番多い回答が「③簡単」（93名）、2番目が「④丁寧」（42名）、3番目が「②会釈」（32名）で、③が多いのは日本人と同じである。2番目の④は日本人に比べると回答全体で占める割合が大きい。グループ別では、在日韓国人・ベトナム人で④の回答が多いのが目に付く。この両グループは接触度の低い人が多いので、接触度が関係している可能性もある。そこで、接触度と回答の関係を調べてみたところ、図表Ⅱ-1-5a、Ⅱ-1-5bのようになった。

図表Ⅱ-1-5a 日本での応答(外国人, 接触度との関係) (複数回答あり) (数字は人数)

	①なし	②会釈	③簡単	④丁寧	⑤他	回答総数
0～2点	3	10	24	19	2	51
3～4点	0	12	30	8	4	47
6点	4	10	39	15	2	57
外国人計	7	32	93	42	8	155
日本人計	16	77	182	36	7	256



図表Ⅱ-1-5b 日本での応答(外国人, 接触度との関係) (数値は回答総数に対する各回答の割合%)

上の図表を見ると、接触度が0～2点の人たちは他のグループに比べ「④丁寧」の回答が多く、「③簡単」の回答が少ないことがわかる。3～4点と6点のグループは日本人とほぼ似たような回答傾向を見せている。したがって、今回の結果は国の違いだけでなく、接触度の違いも関係している可能性がある。しかし、今回の調査では、韓国人・ベトナム人に接触度の低い人が多いなど、いくつかの要素が重なっており、最も関係する要因が国なのか接触度なのか、これだけでは断定できない。

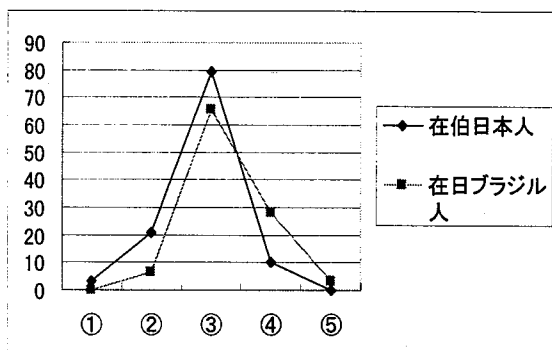
このほか、日本人調査では、①と④の回答数に性別による差が見られたが、外国人調査では性別による差は見られなかった。

Ⅱ.1.1.3.2. 対照国(現住国/母国)での応答

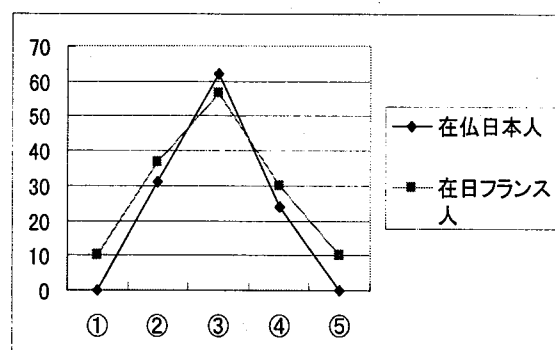
前節では、日本で相手が謝ったときの応答について述べた。ここでは、日本人に対しては現住国、外国人に対しては母国で相手が謝ってきたとき、つまり、場所が対照国(日本以外)のときの応答について分析する。なお、被調査者に提示したリストは日本での応答について尋ねたリストと同じである。結果を示すと、図表Ⅱ-1-6a, Ⅱ-1-6b のようになる。表ではグループを国ごとにまとめながら示した。

図表Ⅱ-1-6a 対照国での自分の応答（複数回答あり）（数字は人数）（[1.0.4.日] [1.0.3.外]）

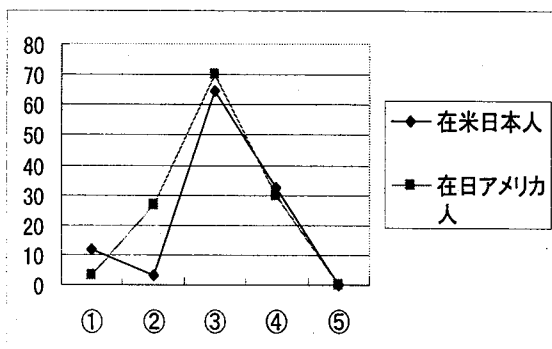
		① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	回答 総数	無調 査	被調査 者数
ブラジル	在伯日本人	1	6	23	3	0	29	1	30
	在日ブラジル人	0	2	21	9	1	32	0	32
フランス	在仏日本人	0	9	18	7	0	29	2	31
	在日フランス人	3	11	17	9	3	30	0	30
アメリカ	在米日本人	4	1	22	11	0	34	4	38
	在日アメリカ人	1	8	21	9	0	30	0	30
韓国	在韓日本人	4	19	19	11	3	50	0	50
	在日韓国人	3	13	17	10	1	32	0	32
ベトナム	在越日本人	2	18	27	5	1	46	0	46
	在日ベトナム人	2	5	23	5	2	30	2	32



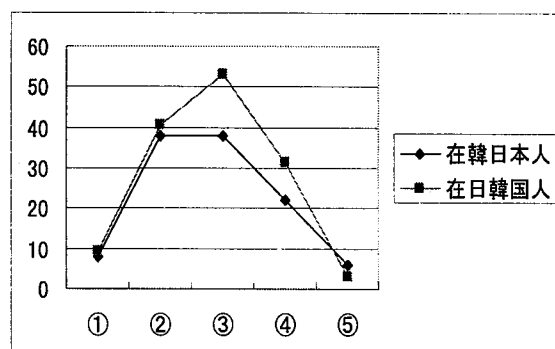
ブラジルで



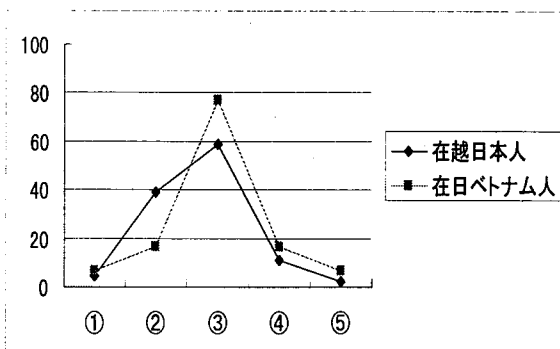
フランスで



アメリカで



韓国で



ベトナムで

図表Ⅱ-1-6b 対照国での自分の応答（複数回答あり）（数値は回答総数に対する各項目の割合%）（[1.0.4.日] [1.0.3.外]）

国ごとに日本人と外国人の回答の差を見ると、ブラジル、フランスの場合はほとんど違いがない。アメリカでは、在住日本人の「②会釈」の回答が母国人に比べ少ない点が目立つ。韓国、ベトナムの場合、全体的には「③簡単」か②が最も多く、次に「④丁寧」となる。両国で②が多いのは、両国とも日本に比べて他人との身体接触を気にしない国であること(後の質問[1.3.]参照)と関係があると思われる。さらに、韓国、ベトナムとも母国の人に比べ在住日本人に②と答えた人が多い。特にベトナムでは、在越日本人と在日ベトナム人でかなりの違いがある。これについては、後ほどさらに詳しく分析する。

性別に関しては、外国人の場合、アメリカと韓国で男性より女性に④の回答が少し多い傾向があるものの、それほど大きな違いは見られなかった。被調査者数が少ないので、はっきりした傾向が出なかった可能性もあり、性別がどの程度関係するかははっきりしない。日本人の場合も、日本での応答に比べ、男女の違いがない。これは、日本での外国人の応答と同様、現地の言葉の能力不足なのか、現地で性別による言葉遣いの差がないことを反映したものなのか、現段階では判断しかねる。また、年齢など他の要素との関係や、日本人の場合は、現住国の人との接触度についても考えなければならないが、人数が少なくてははっきりしたことは言えない。

Ⅱ.1.1.3.3. 日本人から見た現住国の人の応答

今回の調査では、一旦ビデオの場面を見せた後、さらに現住国（日本人に対して質問）／日本（外国人に対して質問）の人が道でぶつかった場合、どのような行動をすると思うか、と尋ねた。すでに触れた[1.0.3][1.0.4]の質問はビデオを見せる前に尋ねており、それらとはビデオを見る前か後かという違いがある。しかし、ビデオ場面に限定せず、一般的な行動について尋ねている点では共通しているので、ここで続けて扱う。まず、日本人調査の調査票該当部分を示す。提示したリストは、[1.0.3][1.0.4]で使用したものと同一である。

<日本人調査 調査票>

1.1.3. では、この国の人同士がぶつかったとして、ぶつかった側の人の言語行動について、[この国]の人は、どういう行動をすることが多いと思いますか？

(この質問はこの章では扱わない)

1.1.4. ぶつかられた人のことですが、相手が謝ってきたあと、[この国]の人は、どういう行動をすることが多いと思いますか？

リスト ①とくに、何もしない。

②会釈するくらいで、言葉には出さない。

③「いいえ」くらいにあたる、簡単な言葉を返す。

④「いいえ、どういたしまして」などにあたる、少し丁寧な言葉を返す。

⑤その他 (睨みかえす、などは、この段階では問題外と考える)

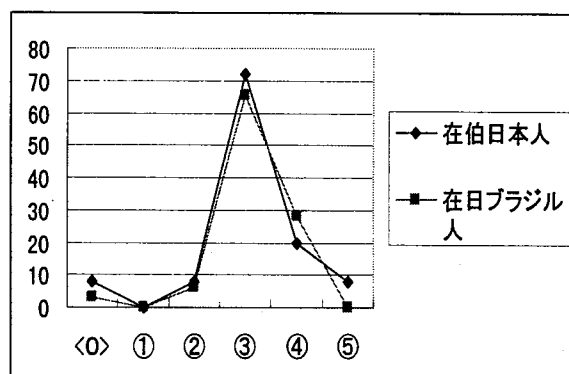
ここでは、この質問の回答と、在日外国人が母国での自分の応答について答えた図表Ⅱ-1-6[1,0,3]の数字と比較しながら、在外日本人から見た現住国の人の行動と現住国の人自身の行動を比べてみる。[1,0,3]の質問は被調査者自身の行動を質問したもので、現住国

の人の一般的な行動を問う[1,1,4]とは質問の趣旨が異なるが、現住国の人と在外日本人の差を見る参考にはなると思われる。

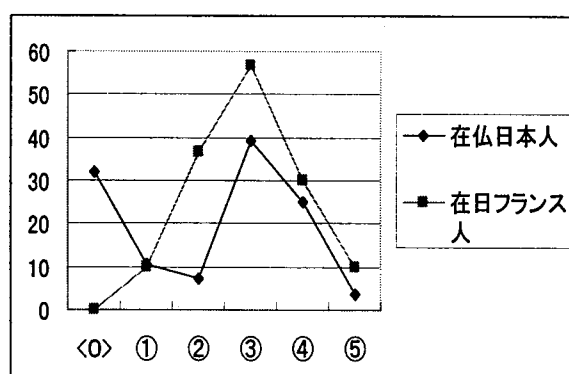
まず、結果を図表Ⅱ-1-7a、Ⅱ-1-7bに示す。[1,1,4]の質問では、「⑤他」の回答の中に、「文句を言う」「注意する」という回答が多かった。これらの行動は、相手の謝罪を受け入れる行動(②③④)やそれを無視する行動(①)とは異なり、謝罪を認めない行動とでも言うべきものである。そこで、リストにはないが、これら「文句を言う」タイプの回答を「<0>文句」として別の項目を立ててみた。この種の回答はリストにないにもかかわらずかなりの数の回答があったので、リストにあれば、さらに数が多くなった可能性がある。なお、図表Ⅱ-1-6では<0>という項目を立てていなかったもので、もう一度被調査者のコメントを見て、<0>に該当する人を抽出し、図表Ⅱ-1-7a、Ⅱ-1-7bに示した。

図表Ⅱ-1-7a 在外日本人から見た現住国の人の応答([1.1.4 日])と現住国の人の回答([1.0.3 外]) (数字は人数)

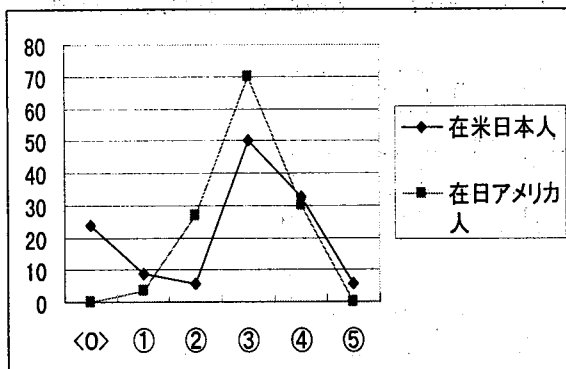
	<0> 文句	① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	回答 総数	無調 査	被調 査 者数
在伯日本人から見た ブラジル人	2	0	2	18	5	2	25	5	30
在日ブラジル人	1	0	2	21	9	0	32	0	32
在仏日本人から見た フランス人	9	3	2	11	7	1	28	3	31
在日フランス人	0	3	11	17	9	3	30	0	30
在米日本人から見た アメリカ人	8	3	2	17	11	2	34	4	38
在日アメリカ人	0	1	8	21	9	0	30	0	30
在韓日本人から見た 韓国人	13	20	5	15	2	0	50	0	50
在日韓国人	1	3	13	17	10	0	32	0	32
在越日本人から見た ベトナム人	13	13	11	11	1	2	43	3	46
在日ベトナム人	0	2	5	23	5	2	30	2	32



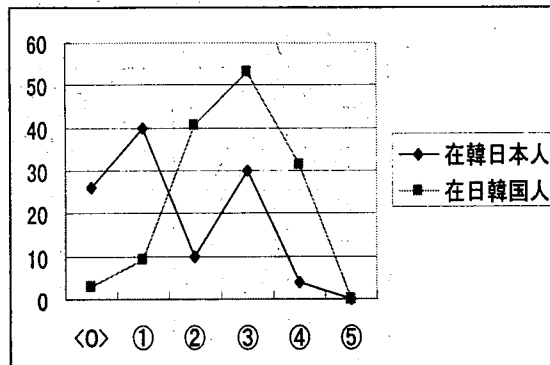
ブラジル人の応答



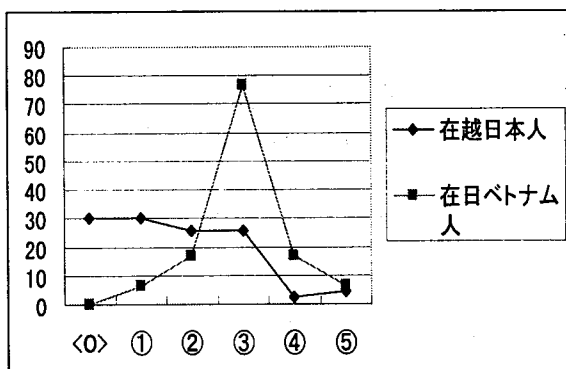
フランス人の応答



アメリカ人の応答



韓国人の応答



ベトナム人の応答

図表Ⅱ-1-7b 在外日本人から見た現住国の人の応答([1.1.4 日])と現住国の人の回答([1.0.3 外]) (数値は回答総数に対する各項目の割合%)

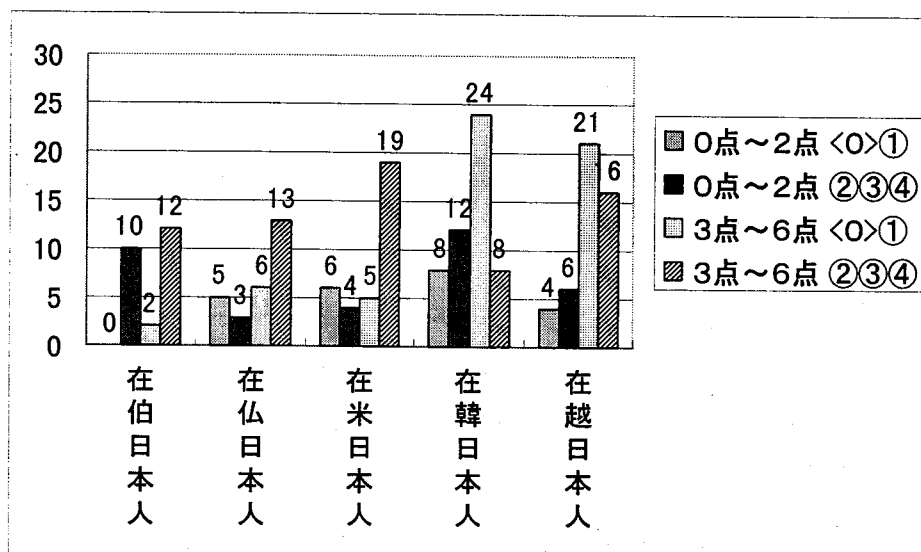
驚いたことに、在伯日本人の回答は在日ブラジル人とほとんど同じ傾向を示している。それだけ在外日本人はブラジル人の行動をよく知っている、あるいは日本とブラジルで差がないということなのかもしれない。在伯日本人は滞在期間が10年以上の人が多いため、ブラジル人の行動をよく知っている可能性が高い。

在仏、在米日本人の回答は、フランス人、アメリカ人の回答と比べ、<0>の回答が目につくものの、全体としては、大きな違いがない。相手が謝ってきたときには応答した方がよいという考え方は、かなりユニバーサルな考え方になっていると思われる。そういう考え方がある以上、自分の行動について述べる[1.0.3 外]の質問では<0>のような回答はしにくい。一方、自分とは直接関係ない一般的な見解を求めている[1.1.4]では、そのような回答のしにくさはない。したがって、<0>あるいは①について2つの質問の間にある程度の差が生じるのは当然のことだと思われる。

在韓、在越日本人の場合は、在日韓国人、ベトナム人の回答とかなりの差がある。どちらも<0>と①が母国の人の回答よりかなり多い。つまり、在韓、在越日本人は、韓国人、ベトナム人の応答について母国の人が思うよりかなりぞんざいな応答をすると思なしている。ただし、在韓日本人、在越日本人がみな現住国の人の応答をぞんざいだと思なしているわけではない。そこで、在外日本人について、被調査者の接触度と[1.1.4]の回答の関係を調べてみた。図表Ⅱ-1-8a、Ⅱ-1-8bはその結果を示したものである。

図表Ⅱ-1-8a 在外日本人から見た現住国の人の応答（被調査者の接触度との関係）（数字は人数）（[1.1.4 日]）

接触点 1,1,4の回答	0点～2点		3点～6点	
	<0>①	②③④	<0>①	②③④
在伯日本人	0	10	2	12
在仏日本人	5	3	6	13
在米日本人	6	4	5	19
在韓日本人	8	12	24	8
在越日本人	4	6	21	16



図表Ⅱ-1-8b 在外日本人から見た現住国の人の応答（被調査者の接触度との関係）（数字は人数）（[1.1.4 日]）

接触度との関係が比較的是っきりしているのが、在韓日本人である。接触度の低い人(0点～2点)は<0>①の回答と②③④の回答が同じぐらいであるのに対し、接触度の高い人(3点～6点)は<0>①の回答がかなり多くなっている。接触度の低い人は、家庭の主婦の人が多く、現住国の人との接触が限られているせいかもしれない。在仏日本人、在米日本人では逆に接触度の高い人ほど②③④の回答が多い。現住国の人に対する見方が接触度によって変わってくることはある程度予想できるが、変化の方向が国によって一定でないということは大変興味深い。今後より詳しく調査する価値があるかもしれない。

以上のように、在外日本人の回答と現住国の人の回答には、ずれがあったりなかったりする。そのずれが在外日本人の行動にどのような影響を及ぼすのか、この点については、あとのⅡ.1.1.3.5., Ⅱ.1.1.3.6.のところで少し触れる。

Ⅱ.1.1.3.4. 在日外国人から見た日本人の応答

前節とは逆に、在日外国人にも、謝罪した相手に対し日本人はどのような応答をすると思うか、という質問をした。外国人調査の調査票該当部分は次の通りである。提示したリストは、日本人調査と同様、[1.0.3][1.0.4]で使用したものと同じである。

<外国人調査調査票>

ここでビデオのことは忘れて考えてください。日本で暮してみても感じることを伺いた
いのです。一般論として答えて下さい。

1.1.3. 日本で日本人同士がぶつかったとして、ぶつかった側の人、どういう行動をす
ることが多いと思いますか？（この質問はこの章では扱わない）

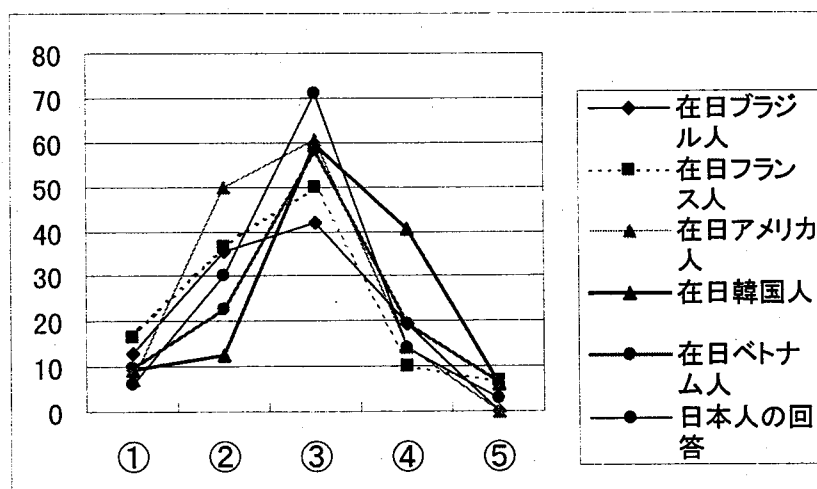
1.1.4. ぶつかられた側の人のことですが、相手が謝ってきたとしたら、どうすることが
多いと思いますか？

- リスト ①とくに、何もしない。
②言葉には出さない。すこし頭を下げるくらい。
③かんたんな言葉を返す。日本語でいえば「いいえ」くらい。
④すこしていねいな言葉を返す。「いいえ、どういたしまして」など。
⑤その他

回答の結果は、図表Ⅱ-1-9a、Ⅱ-1-9b のようになった。参考のため、日本人被調査者に
日本における自分の応答を尋ねた結果[1.0.3 日]も合わせて示す。前節の対照国の場合と
同様、[1.0.3]は被調査者自身の応答を質問したもので、日本人の一般的な行動を問う[1.1.4]
とは質問の趣旨が異なるが、参考の数字にはなると思われる。

図表Ⅱ-1-9a 在日外国人から見た日本人の謝罪に対する応答（複数回答あり）
（数字は人数）（[1.1.4 外]）

	① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	回答 総数	無調 査	被調査 者数
在日ブラジル人	4	11	13	6	0	31	1	32
在日フランス人	5	11	15	3	2	30	0	30
在日アメリカ人	2	14	17	4	0	28	2	30
在日韓国人	3	4	19	13	2	32	0	32
在日ベトナム人	3	7	18	6	2	31	1	32
日本人の回答 [1.0.3日]	16	77	182	36	7	256	3	259



図表Ⅱ-1-9b 在日外国人から見た日本人の謝罪に対する応答（複数回答あり）（数値
は回答総数に対する各回答の割合%）（[1.1.4 外]）

図表を見てわかるように、在日ブラジル人、フランス人、アメリカ人は全体的に同じような傾向を示している。日本人の回答に比べると、②の割合が高い。つまり、この3グループの見た日本人の応答は、日本人自身の応答より全体的に少しぞんざいな応答になっている。前節でフランス人、アメリカ人の応答について尋ねた質問でも、現住国の人自身より在住日本人の回答の方がよりぞんざいであった。これらのグループでは、在外日本人、在日外国人ともに、判断が現住国の人より少しぞんざいな方にずれる、と言えそうである。

これに対し、在日韓国人は④の回答が多く、②の回答が少ない。つまり、日本人の応答に対する判断が、他の国の人より、あるいは日本人より丁寧な方にずれている。前節では、韓国人の応答について、在韓日本人が韓国人よりかなりぞんざいに見ていることが明らかになった。逆に在日韓国人は他の在住日本人や日本人より日本人の応答を丁寧に感じている。つまり、在韓日本人は韓国人の応答を韓国人自身が思うよりぞんざいに、在日韓国人は日本人の応答を日本人自身が思うより丁寧に評価しているのである。在韓日本人、在日韓国人のどちらも現住国の人の回答より、より極端な方向の回答をしているのである。自分の国と現住国の行動様式に差がある場合、行動に対して実際より極端なイメージを持つ傾向があるのかもしれない。ただし、在日ベトナム人では、在日韓国人ほどはっきりした傾向が出ていない。この点については、もう少し検討が必要である。

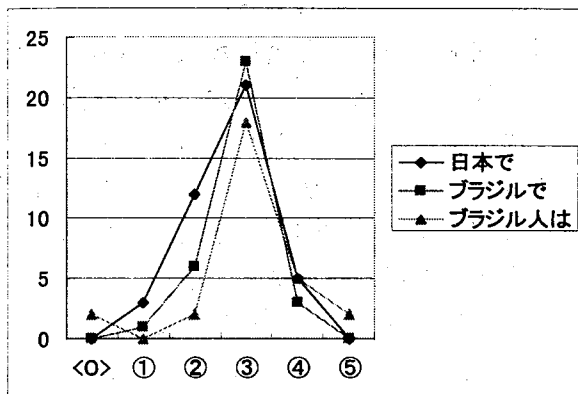
Ⅱ.1.1.3.5. 母国と現住国の差（在外日本人調査）

ここでは、今まで見てきた結果を、母国と現住国という観点からもう一度見てみようと思う。被調査者は母国にいるときと現住国にいるときでは行動が変わるのか、変わるとすれば、現住国の人の行動に影響されるのか、などという点について考えてみる。

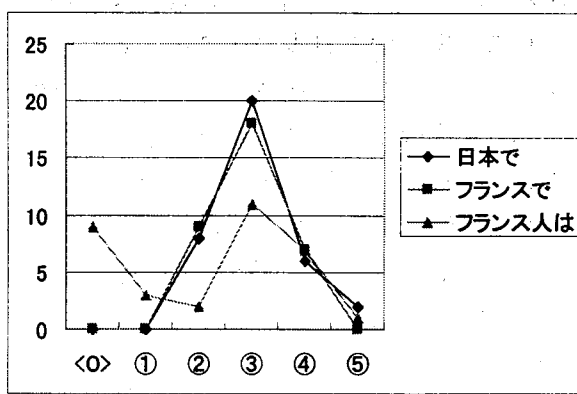
まず、外国在住の日本人についての結果を図表Ⅱ-1-10a、Ⅱ-1-10b に示す。現住国での影響をみるため、現住国の人の一般的な行動について尋ねた結果[1,1,4日]も合わせて示す。

図表Ⅱ-1-10a 母国／現住国で謝罪した相手に対する自分の応答（日本人調査）
（数字は人数）（[1.0.3.日][1.0.4.日][1,1,4日]）

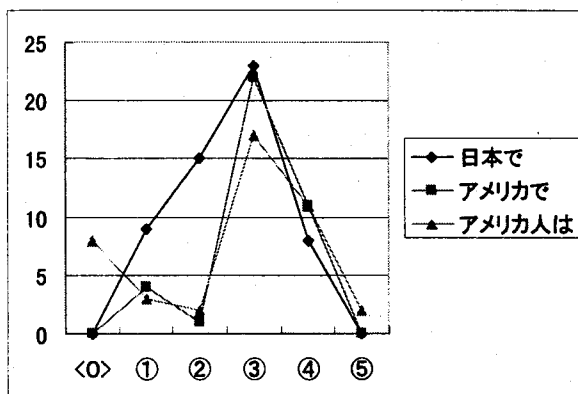
		<0> 文句	① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	無調 査	被調査 者数
在伯 日本人	日本での応答	0	3	12	21	5	0	0	30
	ブラジルでの応答	0	1	6	23	3	0	1	
	ブラジル人は一般に	2	0	2	18	5	2	5	
在仏 日本人	日本での応答	0	0	8	20	6	2	0	31
	フランスでの応答	0	0	9	18	7	0	2	
	フランス人は一般に	9	3	2	11	7	1	3	
在米 日本人	日本での応答	0	9	15	23	8	0	3	38
	アメリカでの応答	0	4	1	22	11	0	4	
	アメリカ人は一般に	8	3	2	17	11	2	4	
在韓 日本人	日本での応答	0	2	13	35	9	1	0	50
	韓国での応答	0	4	19	19	11	3	0	
	韓国人は一般に	13	20	5	15	2	0	0	
在越 日本人	日本での応答	0	1	15	35	5	2	0	46
	ベトナムでの応答	0	2	18	27	5	1	0	
	ベトナム人は一般に	13	13	11	11	1	2	3	



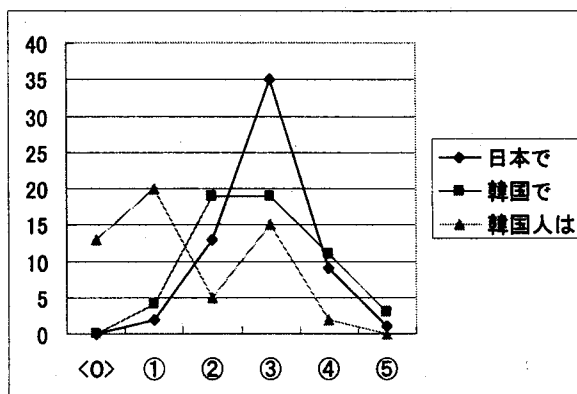
在伯日本人



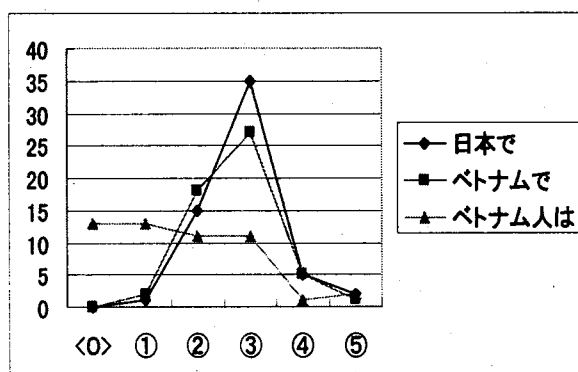
在仏日本人



在米日本人



在韓日本人



在越日本人

図表Ⅱ-1-10b 母国／外国で謝罪した相手に対する自分の応答（日本人調査）（数字は人数）（[1.0.3.日][1.0.4.日][1.1.4日]）

図表Ⅱ-1-10a, Ⅱ-1-10b から、各グループの現住国での応答は、現住国の人と同じ応答をするもの、日本での応答と変わりがないもの、その中間的なものの3つに分けることができる。現住国の人と同じ応答になるのは、在米日本人である。在米日本人は日本のときと比べて、「①なし」「②会釈」が減り、アメリカ人が取るであろう応答と似てきている。

在米日本人は、現住国の人に合わせた行動を取っていると言えそうである。

逆に、現住国と日本の応答に変わりがないのは、在伯、在仏、在越日本人である。この3つのグループは、在越日本人で少し「③簡単」の回答が少ないが、全体の回答傾向は日本でも現住国でもほぼ同じである。このグループは母国と外国での差がないグループと言えよう。特に、在越日本人ではその傾向がはっきりしている。在仏、在越日本人の場合、日本と現住国での応答は、現住国の人が一般にする応答より全体的に丁寧になっている。一方、在伯日本人は、ブラジル人が一般にする応答とほとんど同じ傾向になっている。このことが何を意味するのか、他の場面での回答傾向も含めさらに検討する必要がある。

残った在韓日本人は、日本での応答は③が多く、一方韓国人が一般にするであろう応答は「〈0〉文句」や①が多い。現住国でする応答は、③が減り②が少し増えている。つまり、現住国での応答が、日本での応答と韓国人がするであろう応答の中間的な分布になっている。日本より韓国に近い応答をするが、完全に韓国人のような応答はしない、ということであろうか。在韓日本人も在米日本人と同様、現住国の人の行動に影響を受けていると言えよう。ただし、在米日本人は日本より丁寧な応答をする傾向であるのに対し、在韓日本人は日本のときよりぞんざいな応答をする傾向があり、その変化の方向は逆になっている。ここには示さないが、被調査者一人一人の回答の傾向を見ても、各グループとも図表Ⅱ-1-10a、Ⅱ-1-10bで示した傾向とおおむね似たような傾向を示している。

今回の調査結果から、母国より現住国が丁寧な応答をするときには、現住国に合わせる、母国より現住国の方がぞんざいな応答のときは、母国の応答を維持するという傾向が読みとれる。ただし、在韓日本人と在仏、在越日本人、特に在韓日本人と在越日本人の違いが生じる原因についてはさらに分析が必要である。原因の一つとしては、滞在期間の違いが関係している可能性があると思う。在越日本人はほとんどの人が滞在期間が短い。一方、在韓日本人は在越日本人に比べると滞在期間の長い人が多い。滞在期間について分析を試みたが、今回の調査だけでは、被調査者数が少なくはっきりした傾向は出なかった。他の場面の結果も含め、もう少しいろいろな角度からの分析が必要であろう。

Ⅱ.1.1.3.6. 母国と現住国の差（在日外国人調査）

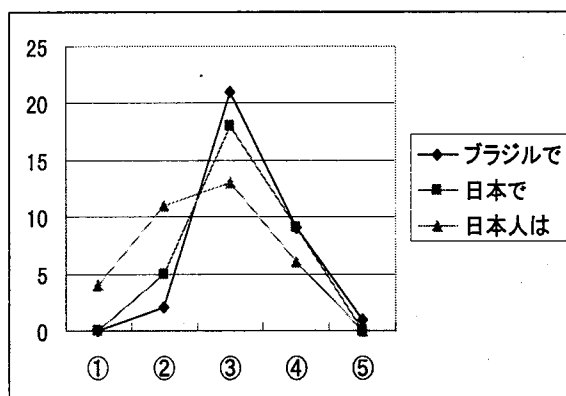
今度は、在日外国人について、母国と現住国（日本）での応答の差を見てみる。まず、結果を図表Ⅱ-1-11a、Ⅱ-1-11bに示す。在外日本人の場合と同様、現住国での影響をみるため、現住国の人（日本人）の一般的な行動について尋ねた結果[1,1,4外]も合わせて示す。

全体的な回答の分布から見て、外国人の場合も、母国と現住国の応答に差がないグループと差があるグループに分かれる。母国と現住国で差がないのは在日ブラジル人、在日フランス人、在日アメリカ人、在日ベトナム人である。その中で、在日フランス人と在日ベトナム人の応答は日本人が一般にするであろう応答とも同じ傾向であり、在日アメリカ人の応答は日本人がするであろう応答よりていねいな傾向にある。一方、在日韓国人の場合は、それほどはっきりした傾向ではないが、日本での応答は韓国での応答より日本人がするであろう応答に近い。

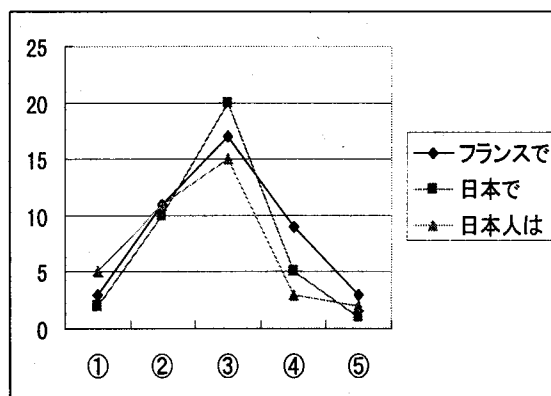
在日外国人全体では、母国と現住国での応答に在外日本人ほどの差は見られない。ぶつかられて相手が謝ったときの応答という行動に関しては、母国と日本の間にそれほど大きな違いを感じていないということであろうか。

図表Ⅱ-1-11a 母国／現住国で謝罪した相手に対する自分の応答（外国人調査）
（数字は人数）（[1.0.3.外][1.0.4. 外][1.1.4 外]）

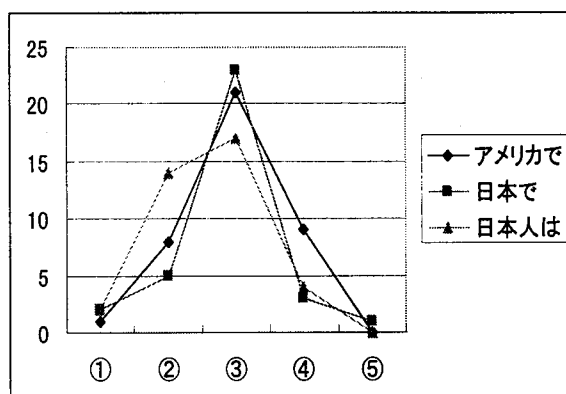
		① なし	② 会釈	③ 簡単	④ 丁寧	⑤ 他	無調 査	被調査 者数
在日 ブラジル人	ブラジルでの応答	0	2	21	9	1	0	32
	日本での応答	0	5	18	9	0	0	32
	日本人は一般に	4	11	13	6	0	1	32
在日 フランス人	フランスでの応答	3	11	17	9	3	0	30
	日本での応答	2	10	20	5	1	1	30
	日本人は一般に	5	11	15	3	2	0	30
在日 アメリカ人	アメリカでの応答	1	8	21	9	0	0	30
	日本での応答	2	5	23	3	1	0	30
	日本人は一般に	2	14	17	4	0	2	30
在日韓国人	韓国での応答	3	13	17	10	1	0	32
	日本での応答	0	7	15	14	5	0	32
	日本人は一般に	3	4	19	13	2	0	32
在日 ベトナム人	ベトナムでの応答	2	5	23	5	2	2	32
	日本での応答	3	5	17	11	1	0	32
	日本人は一般に	3	7	18	6	2	1	32



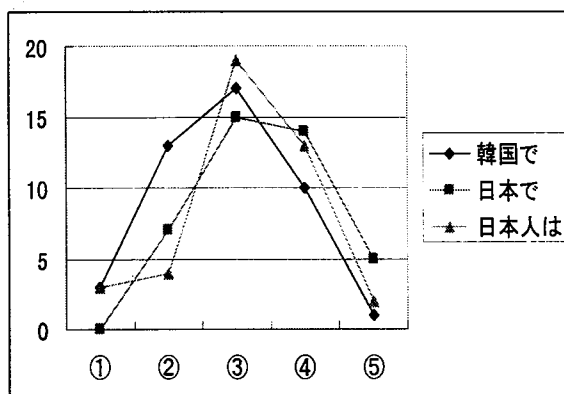
在日ブラジル人



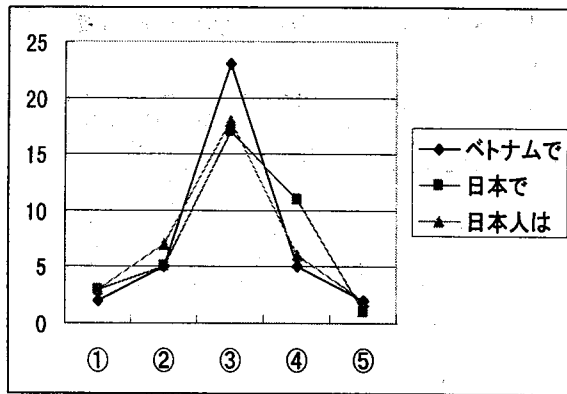
在日フランス人



在日アメリカ人



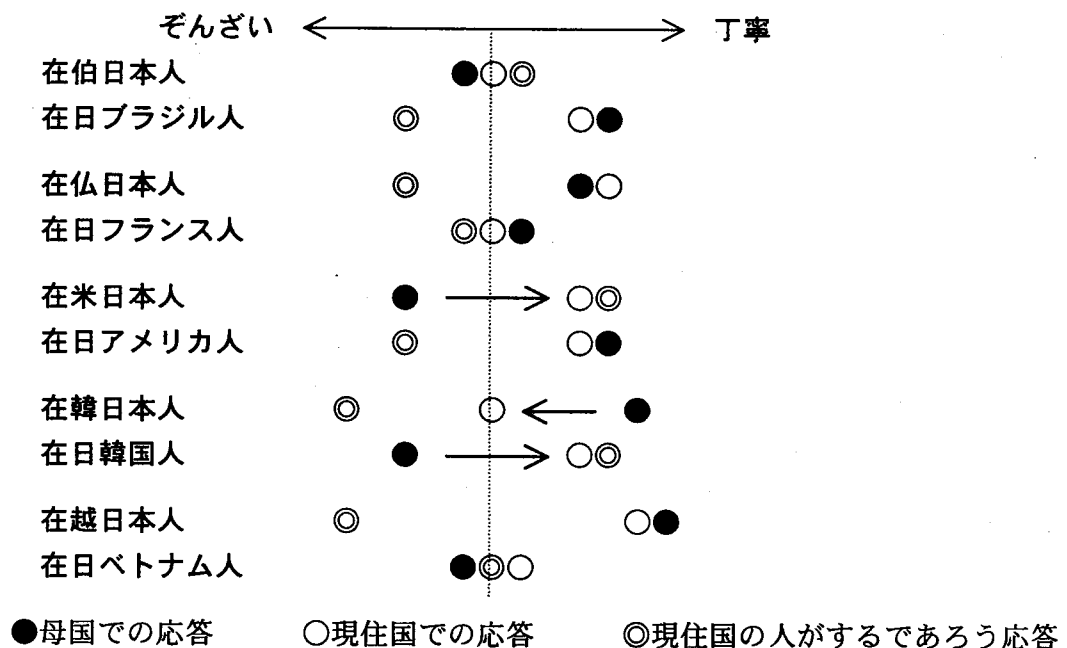
在日韓国人



在日ベトナム人

図表Ⅱ-1-11b 母国／現住国で謝罪した相手に対する自分の応答（外国人調査）
(数字は人数)([1.0.3.外][1.0.4.外][1.1.4 外])

以上、在外日本人と在日外国人における、母国と現住国での応答の異同について見てきた。これまでに明らかになった傾向を図式化すると、図表Ⅱ-1-12 のようになる。図表では母国、現住国での応答および現住国の人ができるであろう応答との差、それぞれの応答が相対的に見てぞんざい・丁寧どちらに位置しているかを示した。



図表Ⅱ-1-12 母国と現住国での異同

上の図表を見ると、まず、アメリカ人と日本人の関係では、アメリカ人はそのまま、日本人がアメリカ人に合わせるという図式が見られる。韓国人と日本人では、お互いに相手の方に合わせようとしている。前に述べたように、全体の傾向としては、母国の方が現住国より丁寧な場合には、母国のやり方を維持する傾向がある。ところが、在韓日本人は母国よりぞんざいな応答になっている。このことが何を意味するのか、大変興味深い問題である。残りのブラジル、フランス、ベトナムはいずれも在外日本人と在日外国人の見方が異なっている。これらの場合、一方のグループが母国より現住国の方がぞんざいだと思っているのに対し、他方は母国も現住国も変わらないと見ているのである。どうしてこのような違いが生じるのか、今のところその原因はよくわからない。

以上のような判断は、全体的な回答傾向から判断したもので、本来は一人一人の回答を

分析すべきものである。被調査者が人数的に少ないため、今回はそこまでの分析は行わなかった。また、被調査者のコメントを簡略化して分類したため、被調査者のコメントの意を十分くみ取ったか定かではない。これら不十分な点は今後さらに分析を進める中で補っていきたい。

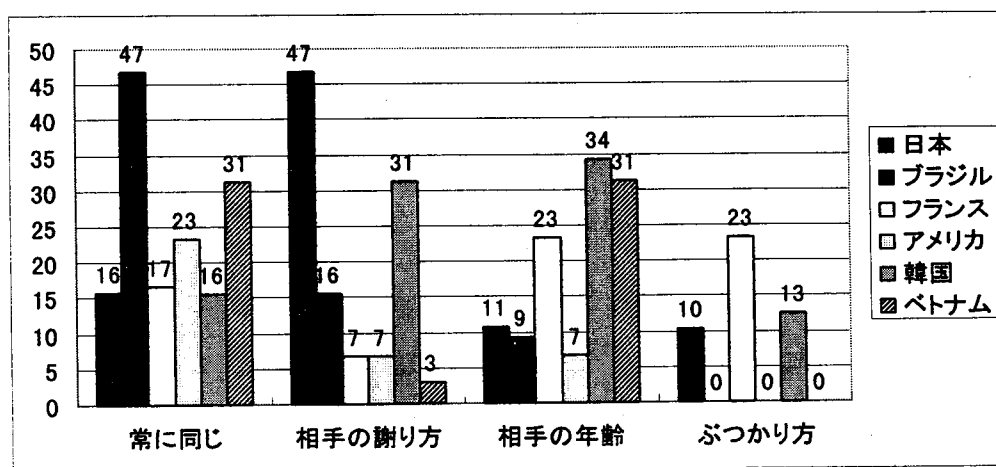
Ⅱ.1.1.3.7. 何を気にしながら応答するか

今回の調査では、謝った相手に応答するとき、何を気にしながら応答するかも尋ねた（[1.0.3s,1.0.4s]）。ここでは、被調査者たちが母国で気にする点、母国と現住国での違いについて結果を検討する。

まず、各グループの人たちが自分の母国で気にする点をまとめると、図表Ⅱ-1-13a、Ⅱ-1-13b のようになる。この質問は基本的に自由回答で、回答は単語だけの場合、コメントの形になっている場合など様々である。ここでは、回答の内容をいくつかに分類した形で示す。なお、すぐに回答が出ない場合、「たとえば、相手の年齢や謝り方など」というような例示を行った。そういう例示が回答の傾向に多少影響を与えた可能性もある。日本人の回答については、現住国による違いが見られなかったため、図表ではまとめて示した。

図表Ⅱ-1-13a 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（複数回答あり）（母国で）（数字は人数）（[1.0.3s 日,1.0.3s 外]）

	日本人	ブラジル人	フランス人	アメリカ人	韓国人	ベトナム人
常に同じ	41	15	5	7	5	10
相手の謝り方	121	5	2	2	10	1
相手の年齢	28	3	7	2	11	10
ぶつかり方	27	0	7	0	4	0
被調査者数	259	32	30	30	32	32



図表Ⅱ-1-13b 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（複数回答あり）（母国で）（数字は被調査者数に対する各回答の割合%）（[1.0.3s 日,1.0.3s 外]）

図表を見ると、グループによって気にする点がかなり異なっている。日本人は、相手の謝り方を気にする人が最も多く、それ以外の要素はそれほど多くない。日本人は相手の行動に合わせて自分の行動を取るとよく言われるが、この結果もそのような行動様式を示すものかもしれない。韓国人とベトナム人は相手の年齢をあげる人が多かった。これは、

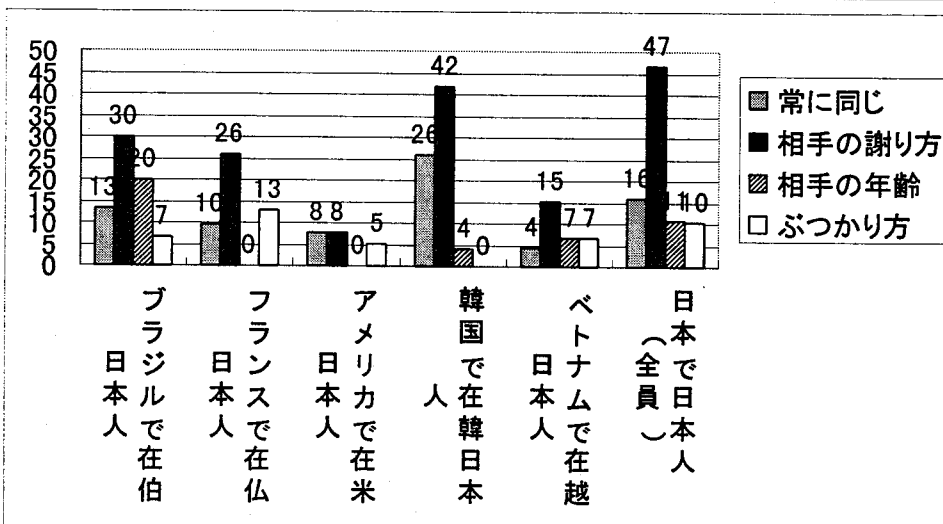
韓国やベトナムでは人間関係において年齢が重要視されるためであろう。このほかには、ブラジル人ではいつも同じと答える人が多いこと、フランス人では他の国の人よりぶつかり方をあげる人が多かったことが目に付く。この結果をさらに分析するためには、それぞれの国についてさらに詳しい情報が必要である。

なお、ここで示した回答の他に、相手の態度（怒っているかなど）、場所、そのときの自分の気分、そのときの状況（自分が急いでいるかなど）、相手の性別、相手の身なりなどの回答があった。

次に、母国と現住国で気にする点に違いがあるのか、各グループの結果を検討してみる。図表Ⅱ-1-14a、Ⅱ-1-14b は日本人の回答を、まとめたものである。

図表Ⅱ-1-14a 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（母国と現住国で、日本人調査）（複数回答あり）（数字は人数）（[1.0.3s 日,1.0.4s 日]）

		常に同じ	相手の謝り方	相手の年齢	ぶつかり方	被調査者数
現住国で	ブラジルで在伯日本人	4	9	6	2	30
	フランスで在仏日本人	3	8	0	4	31
	アメリカで在米日本人	3	3	0	2	38
	韓国で在韓日本人	13	21	2	0	50
	ベトナムで在越日本人	2	7	3	3	46
母国で	日本で日本人(全員)	41	121	28	27	259



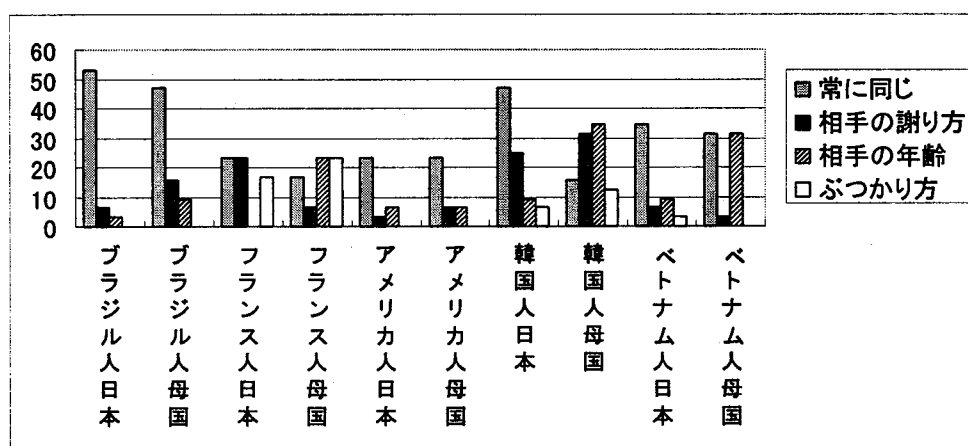
図表Ⅱ-1-14b 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（母国と現住国で、日本人調査）（複数回答あり）（数字は被調査者数に対する各回答の割合％）（[1.0.3s 日,1.0.4s 日]）

上の図表を見ると、日本人に関しては、外国と母国で顕著な違いは見られない。外国でも「相手の謝り方」を気にする人が多い。「常に同じ」という回答が日本に比べて多いように思うが、人数が少なくはっきりしたことは言えない。応答の仕方自体が母国と外国でかなり違っていた在韓日本人を見ても、気にする点では日本と韓国であまり違いがない。母国と外国で応答の仕方が違っていても、気にする点はあまり変えないということであろうか。

日本人と同様、在日外国人についても、母国と現住国（日本）での違いを調べてみた。結果は図表Ⅱ-1-15a、Ⅱ-1-15b のようになった。

図表Ⅱ-1-15a 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（母国と現住国で、外国人調査）（複数回答あり）（数字は人数）（[1.0.3s 外,1.0.4s 外]）

		常に同じ	相手の謝り方	相手の年齢	ぶつかり方	被調査者数
在日 ブラジル人	外国(日本)	17	2	1	0	32
	母国	15	5	3	0	
在日 フランス人	外国(日本)	7	7	0	5	30
	母国	5	2	7	7	
在日 アメリカ人	外国(日本)	7	1	2	0	30
	母国	7	2	2	0	
在日 韓国人	外国(日本)	15	8	3	2	32
	母国	5	10	11	4	
在日 ベトナム人	外国(日本)	11	2	3	1	32
	母国	10	1	10	0	



図表Ⅱ-1-15b 相手の謝罪に対して何を気にしながら応答するか（母国と現住国で、外国人調査）（複数回答あり）（数字は被調査者数に対する各回答の割合%）（[1.0.3s 外,1.0.4s 外]）

在日外国人の場合は、母国と日本で若干違いがある。フランス人、韓国人、ベトナム人は母国ほど「相手の年齢」を気にしておらず、「常に同じ」という回答の割合が多くなっている。原因の一つとして、日本語力の問題が考えられる。臨機応変に言葉を使い分けるにはかなりの日本語力が必要であり、日本語力が不足していれば、同じ応答をせざるを得ない。実際、被調査者の中には、いつも同じである原因として日本語能力の不足を挙げた人がいた。ブラジル人とアメリカ人は母国と日本で大きな違いはない。

日本人調査と外国人調査の結果を見ると、今回の調査に関する限り、現住国の人の影響を受けて気にする点が変化する兆候は見いだせなかった。何を気にするかという点は、簡単には変化しないものなのかもしれない。この質問については、コメントをもう少し分析する必要がある。

Ⅱ.1.1.4. ぶつかったときどちらから声をかけるか（ビデオ見て）

次に、ビデオを見せながら行った調査について、その結果を見ていく。ビデオを使用することによって、どういう人（性別、年齢など）がどのようにして（走っていた、など）ぶつかったのか、被調査者に対して具体的でかつ共通した情報を示すことができる。この点が、これまで述べてきたビデオなしでの調査と大きく異なる点である。

まず、調査ではおおよその状況を説明してから、ぶつかる場面を音声なしで見せた。以下、その部分の調査票を示す。

1.1.0. 前提の説明

これから、短い映像を見ていただきます。出てくる場面は、日本のマンション（集合住宅）の廊下です。二人の女性がすれちがう時に、一方が急いでいたためにぶつかりそうになり、ちょっと体がふれあいました。二人は、互いに見知らぬ同士です。二人は何か言葉をかわしていますが、まず、音声を消して見ていただきます。

1.1. 刺激映像（ぶつかった直後まで）を音声なしで提示して

1.1.1. 追加 1

まず、この場面を、[日本・東京] での日本人同士の出来事だとして考えて下さい。

- (1) [日本・東京] では、この二人のうち、どちらから声をかけるのが普通だと思いますか？
- (2) ぶつかった方（若い女性）が先に謝らないとしたら、どんな感じがしますか？
- (3) ぶつかられた方（着物の女性）が先に何かを言うとしたら、どんな感じがしますか？

1.1.1. 追加 2

では、この場面を、[この国] / [母国] での出来事だとして考えてみて下さい。

- (1) [この国] / [母国] で、この国／母国の人同士がぶつかったとしたら、二人のうち、どちらから声をかけるのが普通だと思いますか？
- (2) ぶつかった方が先に謝らないとしたら、どんな感じがしますか？
- (3) ぶつかられた方が先に何かを言うとしたら、どんな感じがしますか？

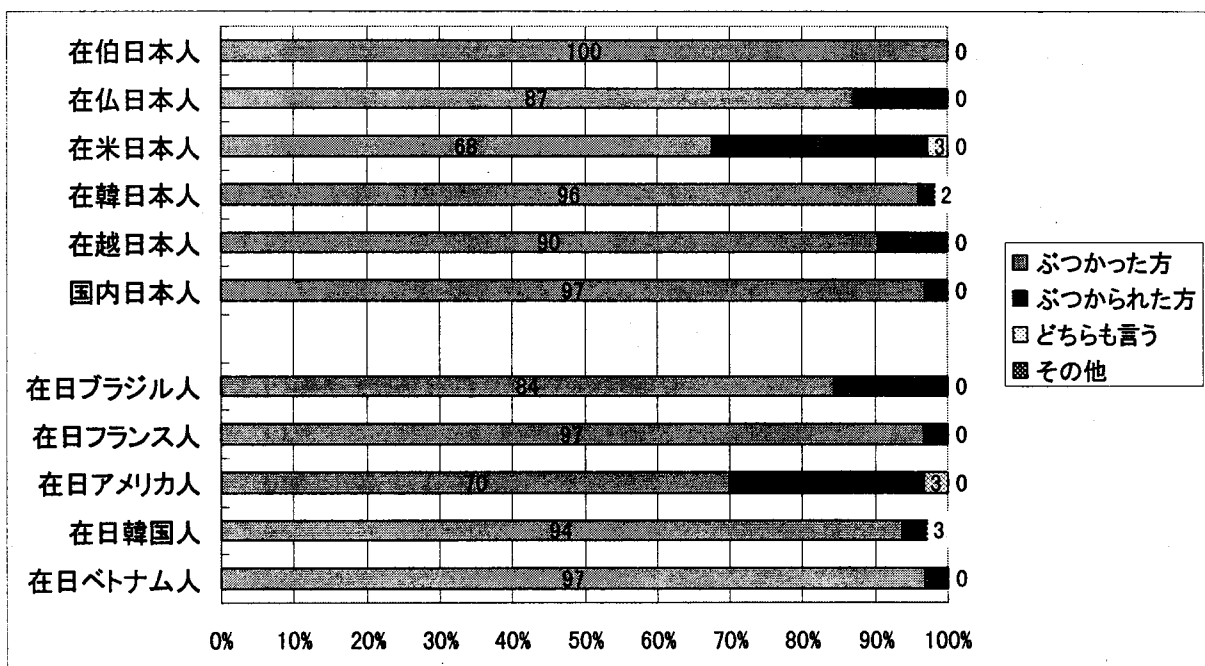
Ⅱ.1.1.4.1. 日本での出来事なら

最初に、ビデオで見せた場面について、日本ではぶつかった方、ぶつかられた方のどちらから声をかけると思うかと質問した。結果は図表Ⅱ-1-16a、Ⅱ-1-16b のようになった。

全体的には、各グループとも「ぶつかった方」という回答が大多数である。ただし、在米日本人、在日アメリカ人の両グループは比較的「ぶつかられた方」という回答が多い。両グループとも、場所がアメリカだったという質問（[1.1.2.(1)]）に対しては、「ぶつかった方」という回答が多く（図表Ⅱ-1-17a、Ⅱ-1-17b 参照）、日本とアメリカで行動が違っていると感じている人が多い。つまり、アメリカ人ならぶつかった方が声をかけるが、日本人ならぶつかられた方が声をかけるだろうと思う人がかなりいる。在米日本人、在日アメリカ人の回答傾向は、アメリカとの違いを強く意識した結果とも考えられるが、詳しくは今後の検討課題である。

図表Ⅱ-1-16a 日本ならどちらから声をかけるか（数字は人数）（[1.1.1.(1)]）

[1.1.1.(1)]の回答	ぶつかった方	ぶつかられた方	どちらも言う	その他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	27	0	0	0	27	3	30
在仏日本人	27	4	0	0	31	0	31
在米日本人	25	11	1	0	37	1	38
在韓日本人	48	1	0	1	50	0	50
在越日本人	38	4	0	0	42	4	46
国内日本人	62	2	0	0	64	0	64
在日ブラジル人	27	5	0	0	32	0	32
在日フランス人	29	1	0	0	30	0	30
在日アメリカ人	21	8	1	0	30	0	30
在日韓国人	30	1	0	1	32	0	32
在日ベトナム人	31	1	0	0	32	0	32
総計	365	38	2	2	407	8	415



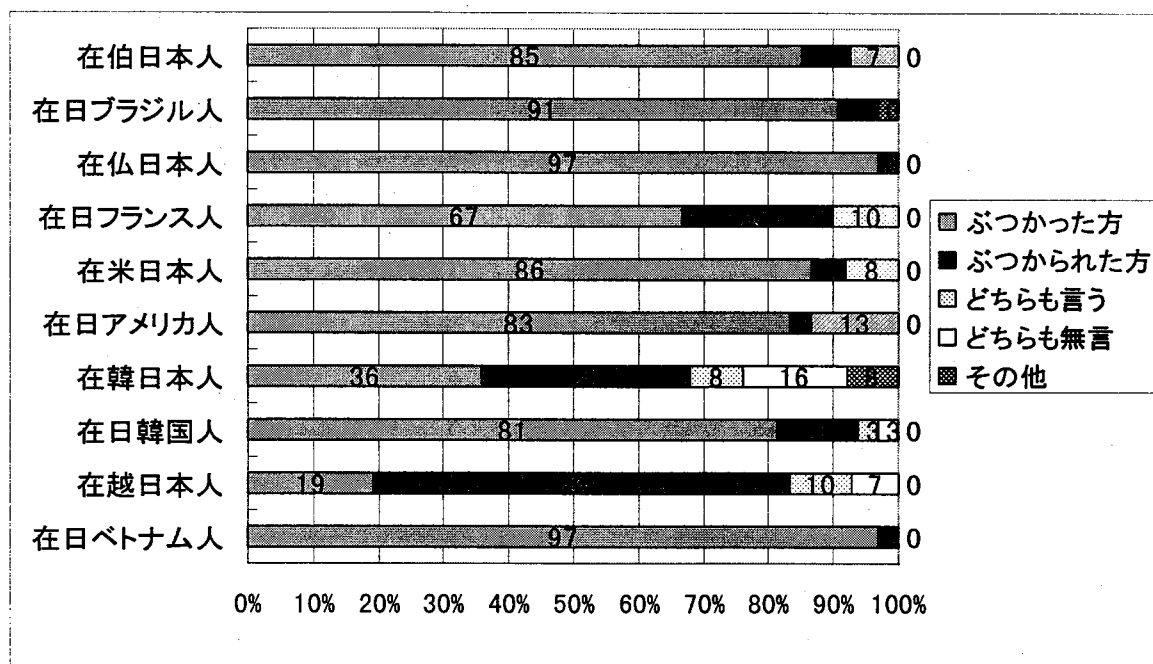
図表Ⅱ-1-16b 日本ならどちらから声をかけるか（数字は各項目の回答総数に対する割合％）（[1.1.1.(1)]）

Ⅱ.1.1.4.2. 対照国（現住国／母国）での出来事なら

次に、ビデオのぶつかりの場面が対照国、つまり、現住国(日本人調査)／母国(外国人調査)で起こった場合はどちらから声をかけるか、という質問をした。その結果が図表Ⅱ-1-17a、Ⅱ-1-17b である。なお、図表では、日本での出来事の場合にはほとんどなかった「どちらも何も言わない」という回答がかなりあったので、「どちらも無言」という項目を独立して設けている。

図表Ⅱ-1-17a 対照国（現住国／母国）ならどちらから声をかけるか（数字は人数）（[1.1.2.(1)]）

[1.1.2.(1)]の回答	ぶつかった方	ぶつかられた方	どちらも言う	どちらも無言	その他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	23	2	2	0	0	27	3	30
在日ブラジル人	29	2	0	0	1	32	0	32
在仏日本人	30	1	0	0	0	31	0	31
在日フランス人	20	7	3	0	0	30	0	30
在米日本人	32	2	3	0	0	37	1	38
在日アメリカ人	25	1	4	0	0	30	0	30
在韓日本人	18	16	4	8	4	50	0	50
在日韓国人	26	4	1	1	0	32	0	32
在越日本人	8	27	4	3	0	42	4	46
在日ベトナム人	30	1	0	0	0	31	1	32
総計	241	63	21	12	5	342	9	351



図表Ⅱ-1-17b 対照国（現住国／母国）ならどちらから声をかけるか（数字は各項目の回答総数に対する割合％）（[1.1.2.(1)]）

おおよその傾向としては、ブラジル、アメリカとも日本で起こった場合とよく似ている。異なる点は、「どちらも言う」という回答があるくらいである。在外日本人と在日外国人の回答にも大きな差がない。あとの3国は、日本の場合と異なる回答傾向になっている。ただし、在外日本人と在日外国人のどちらも日本と異なるのではなく、どちらか一方のグループが日本の場合と異なる回答傾向を示している。言い換えれば、この3つの国では在外日本人と在日外国人の回答傾向がずれているということになる。

まず、在外日本人の回答が特徴的なのが、韓国とベトナムである。在日韓国人、ベトナム人は「ぶつかった方」という回答が多く、これは日本で起こった場合とよく似ている。

一方、在韓、在越日本人は、「ぶつかられた方」という回答が多く、特に在越日本人では圧倒的に「ぶつかられた方」が多い。また、在韓日本人では「どちらも無言」という回答もかなりある。つまり、在韓日本人、在越日本人は、韓国人、ベトナム人の行動は日本人とは違うと思っているのである。そして、その意識は現住国の人の意識とはかなり差がある。同じことは、Ⅱ.1.1.4.3.で日本人から見た現住国の人の応答と現住国の人自身の応答を比べたときにも見られた。在韓日本人、在越日本人と在日韓国人、在日ベトナム人の差は、本章で扱う範囲では最も特徴的な点の一つである。さらに、回答と滞在年数や接触度との関連性を探ったが、今のところはっきりした傾向は見いだせていない。

残ったフランスの場合は、韓国、ベトナムの場合と逆で、在仏日本人より在日フランス人の回答に「ぶつかられた方」という回答が多い。フランスの場合も、Ⅱ.1.1.4.3.で日本人から見た現住国の人の応答と現住国の人自身の応答を比べた際、両者の間に差が見られた。韓国、ベトナムと同様、在仏日本人が思っているフランス人像とフランス人が思っているフランス人像にはずれがあるようである。

なお、被調査者のコメントを見ると、「ぶつかられた方」という回答の中には、いろいろなタイプがあることがわかる。ぶつかられた方が抗議するという回答の他に、ぶつかられた方がびっくりして声を出すという回答もあった。詳しいコメントがない回答もあるので、ここでは、特に区別せずに扱ったが、今後詳しく分析する際には注意する必要がある。

Ⅱ.1.1.5. ぶつかられた側の行動について（ビデオ見て）

続いて、調査では二人の人物がぶつかったあと何か言葉を交わしている場面まで音声を消して見せた。その部分の調査票を次に示す。

映像見せる（ぶつかった後二人が何か言っているところまで）（音声なし）

1.1.1. この場面は、[日本・東京]での出来事です。この人（ぶつかられた人）はどんな内容の言葉を言ったと思いますか、簡単に説明してください。

sub-1. 画面の中のどんなことを手がかりにして、そのように判断しましたか？

sub-2. もし、あなたご自身が、この人の立場になったら、こんな時にどんな言葉をおっしゃると思いますか？ やはり、[日本・東京]でのこととして考えて下さい。

Ⅱ.1.1.5.1. ぶつかられた人は何と言ったか、回答の手がかりは

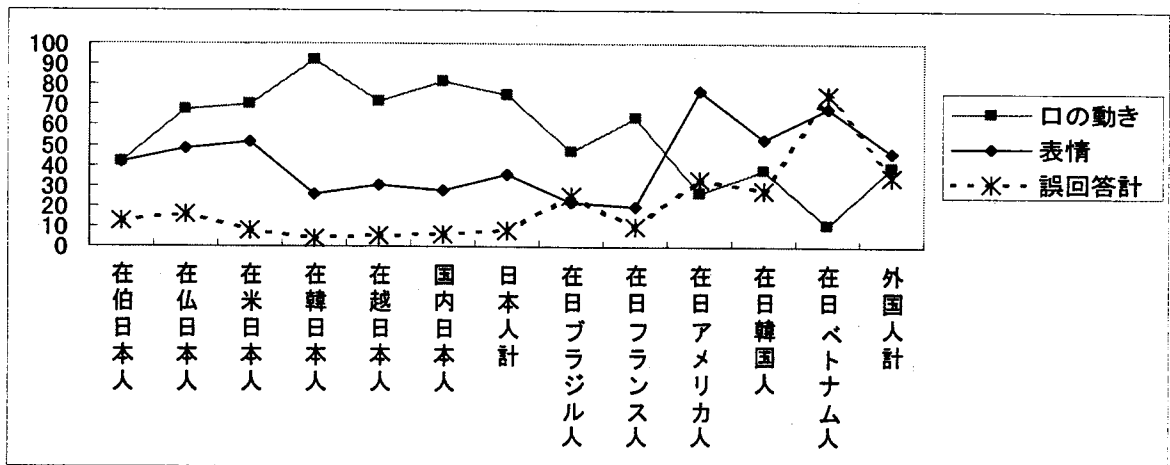
ビデオではぶつかったあと、ぶつかられた人の方が何かを言っている姿が映った。まず、その人が何と言っているかを質問し([1.1.1])、さらに何を手がかりにそう言ったと思ったかを尋ねた([1.1.1.s-1])。次の図表Ⅱ-1-18では、質問[1.1.1]で、せりふを間違えて言った人およびせりふがわからなかった人の数、さらに被調査者がせりふを答える際に手がかりにした事項のうち数が多かったものを示した。

図表Ⅱ-1-18 ぶつかられた人は何と言ったか[1.1.1.], 何を手がかりにしたか
[1.1.1.s-1](単位は人数)

	何と言ったか [1.1.1.]				何を手がかりにしたか [1.1.1.s-1]			
	せりふを間違った人	無回答	誤回答計	回答総数	口の動き	表情	状況全体	回答総数
在伯日本人	3	0	3	24	10	10	4	24
在仏日本人	5	0	5	31	21	15	10	31
在米日本人	2	1	3	37	26	19	1	37
在韓日本人	2	0	2	50	46	13	2	50
在越日本人	1	1	2	39	28	12	5	39
国内日本人	1	3	4	64	52	18	7	64
日本人計	14	5	19	245	183	87	29	245
在日ブラジル人	3	5	8	32	15	7	6	32
在日フランス人	3	0	3	30	19	6	4	30
在日アメリカ人	9	1	10	30	8	23	0	30
在日韓国人	9	0	9	32	12	17	6	32
在日ベトナム人	12	12	24	32	2	13	2	19
外国人計	36	18	54	156	56	66	18	143

上の図表を見ると、在外、国内を問わず日本人の多くが「口の動き」を手がかりにしている。日本人の中で在伯日本人だけは「口の動き」をあげた人がそれほど多くない。ビデオでは、ぶつかった女性の顔がクローズアップされており、音は消してあっても口の動きからおおよそのせりふをつかむことが可能であった。「口の動き」の他には「表情」や「状況全体」をあげた人が比較的多かった。日本人の回答の傾向を見ると、手がかりを得る場所の中心は口であり、さらに顔、身体、周りの状況と次第に範囲が広がっていている。

一方、在日外国人では、在日ブラジル人と在日フランス人は「口の動き」が一番多く、在日アメリカ人、在日韓国人、在日ベトナム人は「口の動き」より「表情」をあげた人が多かった。「口の動き」が少なかった在日アメリカ人、在日ベトナム人ではせりふを間違ったりわからなかった人が多い。そこで、図表Ⅱ-1-19 では、「口の動き」と「表情」をあげた人と誤回答をした人の数の関連性を見てみた。



図表Ⅱ-1-19 せりふの誤回答[1.1.1.]と回答の手がかり[1.1.1.s-1]の関係(数値は回答総数に対する各回答の割合%)

図表でわかるように、「口の動き」の数と誤回答の数はほぼ反比例している。「口の動き」を手がかりにしない場合ほどせりふの内容も間違ふという関係が比較的是っきりと読みとれる。在日アメリカ人や在日ベトナム人で「表情」を手がかりにする人が多いのは、国によって注目する点が違うためなのか、日本語力がなく口の動きを見ようとしなかったためなのか、今のところはっきりしない。今回の調査では、在日外国人の日本語力について詳しい質問をしなかったで、日本語力との関連性はつかみにくい。この点は、調査の反省点の一つである。

このほかの回答としては、「身振り」「相手の反応」「ぶつかられた人の雰囲気」「年齢」「自分の経験」「しゃべっている長さ」「ぶつかられた人の服装」(和服を着ていた)という回答もあった。

Ⅱ.1.1.5.2. 自分なら何と言うか

ぶつかられた人のせりふを尋ねたあと、さらに自分がぶつかられた人なら、何と言うかと質問した。この質問は自由回答なので、様々な回答、コメントがあった。それらの回答のうち、第1回答あるいは最も自然だと答えた回答を分類すると、以下のように分類することができる。どのようなコメントがあったかを合わせて示す。○は日本人のコメント、●は外国人のコメントであることを示す。コメントのあとの(ブ)(フ)(ア)(韓)(ベ)は、そのコメントがそれぞれ在日ブラジル人、在日フランス人、在日アメリカ人、在日韓国人、在日ベトナム人であることを示す。

①無言(自分から積極的に何も言わない場合)

○黙って相手を見るだけ。振り返って相手の反応・出方を見る。振り向いて相手の顔を見る。相手が謝るのを待つ。むっとするけど何も言わない。何も言わず心の中で憤慨する。そのままぼうと立っている。何も言えない。

むっとしてにらむ。振り返ってにらみつける。

●相手を見るだけ(ブ)(ア)(韓)(ベ)。振り向くだけ(韓)。相手が謝るのを待つ(ブ)(フ)(ベ)。相手の出方を見る(韓)。いやな顔をする(ブ)。黙って通る(ベ)。びっくりして何か言う余裕はない(フ)。相手がどういう人か判断できないので何も言わない(ブ)。

無言でにらむ(韓)。

「無言」という回答の中には、上のコメントでわかるように、無言で相手をにらむという回答も含まれている。この種の回答は日本人に多く、12人から同様の回答があった(外国人は1名だけ)。「無言でにらむ」という回答は「抗議」の意を含むという点で、あとで示す「抗議」の回答に含むことも考えられるが、今回はどういう言葉を発するかをもとに分類したため、「無言」の回答として扱った。なお、「にらむ」という回答を「抗議」に含んだとしても、全体の結果が大きく変わることはない。

②叫び(アッ、痛イ、イタッ、危ナイ、などとっさにあげる叫び声)

回答では語形が少し違う場合があるが、代表的な形のみをあげる。

○アッ。オット。アラ。ワァ。エッ。キャッ。

イタイ(イタッ)。アブナイ。

アッ、イタイ(イタ)。アッ、アブナイ。アービックリシタ。

●アー。ア、アブナイ。ア、ビックリシタ。(ブ) アーオ。アラァ。エッ。OH, la la!(フ)

アッ。ウォー。(ア) アッ。イタイ。(韓) アッ。(ベ)

③抗議（危ナイワネ、など相手に対してはっきりとした抗議の意志を伝える場合）

この場合も少しずつ語形が異なっているが、代表的な形のみをあげる。

○アブナイネ（～ジャナイカ）。イタイジャナイ。ナンダヨ、アブナイジャナイカ。

キヲツケテ（～テクダサイ）。オイ。チョット。

アブナイナ、キヲツケテ。イタイワネ、キヲツケナサイ。

アンマリハシルナヨ。ソンナニ、イソイデ。ナニアワテテンノ。

アヤマレ。コラオマエ、ドコミテンダ。イテエナ、コノヤロウ。

ナンナノヨ、アノコハ。アラ、ドウシチャッタノカシラ。

●キヲツケテ（～クダサイ）。アブナイ（～デスヨ）。ソンナニイソイデイタラ。アラマア、キヲツケテチョウダイネ。ナンデショウ、ソンナシツレイナコト。(ブ)

キヲツケテ（～クダサイ）。アブナイワネ（～ジャナイカ）。アブナイ、キヲツケテクダサイ。オイオイオイ、チョットチョット、アブナイヨ。(フ)

オイ。ダメダヨ。シツレイナ。オイ、キヲツケテヤ。(ア)

アブナイデスヨ。キヲツケテクダサイ。イタイナ、ナンダ。ドウシタンデスカ、キヲツケテクダサイ。(韓)

被調査者のコメントの中には、相手に聞こえるように「イタイ」と言う、というコメントもあった。この場合は、「イタイ」という言葉に単なる「叫び」ではなく、「抗議」に近い意味合いが込められている。しかし、ここでは明確に抗議の意味を伴う言葉だけを「抗議」のタイプに分類した。

④謝罪（すみません、など相手に謝る場合）

○ゴメンナサイ、ポケットシテテ。

●すみません。(ア) ア、ゴメンネ。(韓) ゴメン。ゴメンナサイ。(ベ)

在日アメリカ人はこの種の回答をした人が9人いたが、全員「すみません」と答えた。

⑤安否（大丈夫デスカ、と相手の安否を尋ねたり、自分の状態を告げる場合）

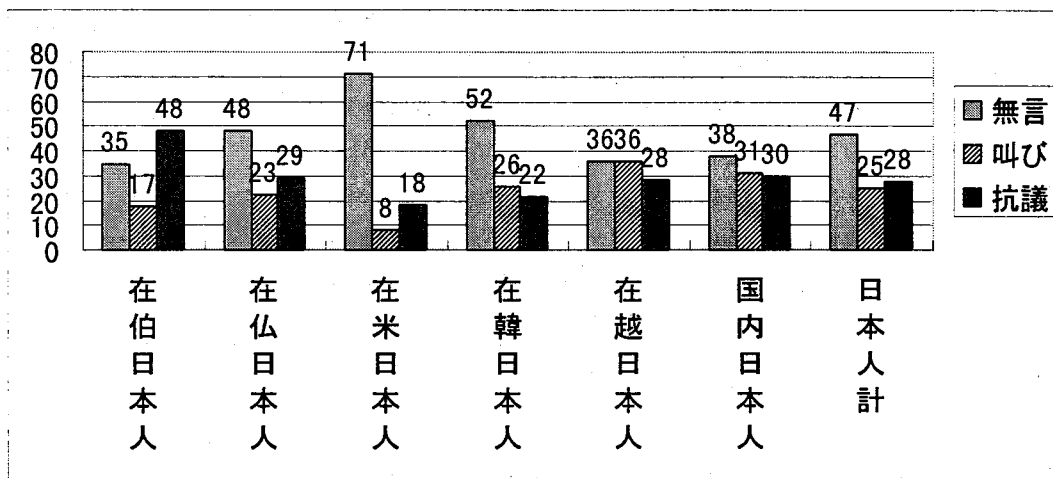
○ダイジョウブデスカ。

●ドウシタ。ケガシマシタカ。(ブ) ダイジョウブデスヨ。(韓) ドウシタンデスカ。(ベ)

以上の分類をもとに、まず、日本人各グループの回答傾向を示すと、図表Ⅱ-1-20a、図表Ⅱ-1-20b のようになる。

図表Ⅱ-1-20a 自分だったら何と言ったか（日本人）（数字は人数）[1.1.1.s-2]

	無言	叫び	抗議	謝罪	安否	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	8	4	11	0	0	23	7	30
在仏日本人	15	7	9	0	0	31	0	31
在米日本人	27	3	7	1	0	38	0	38
在韓日本人	26	13	11	0	0	50	0	50
在越日本人	14	14	11	0	0	39	7	46
国内日本人	23	19	18	0	1	61	3	64
日本人計	113	60	67	1	1	242	17	259

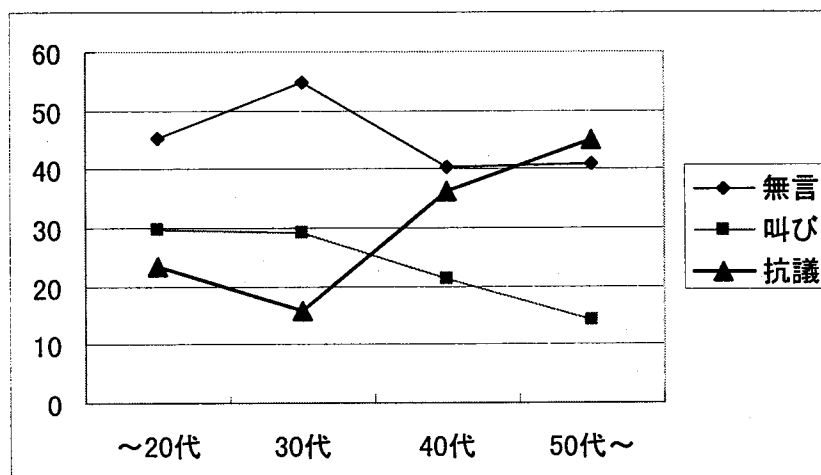


図表Ⅱ-1-20b 自分だったら何と言ったか（日本人）（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.1.1.s-2]

これまでの質問では、日本人の場合、日本での事柄に関しては在外日本人各グループと国内日本人の間にはそれほど大きな差は見られなかった。しかし、この質問では、グループによってかなりの差が見られる。特に目に付くのは、在伯日本人で「抗議」が多いこと、在米日本人で「無言」が多いことである。さらに、日本人全体を年代別に見ると、図表Ⅱ-1-21a、図表Ⅱ-1-21b のようになった。

図表Ⅱ-1-21a 自分だったら何と言ったか（日本人年代別）（数字は人数）[1.1.1.s-2]

	無言	叫び	抗議	謝罪	安否	回答総数
～20代	29	19	16	0	1	65
30代	45	24	15	0	0	84
40代	19	10	17	1	0	47
50代～	19	6	24	0	0	49
日本人計	113	60	67	1	1	242



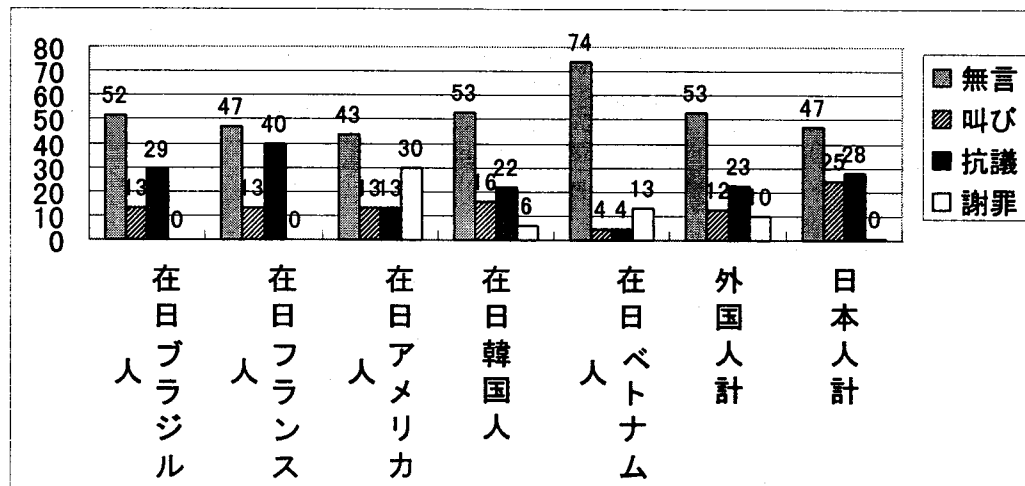
図表Ⅱ-1-21b 自分だったら何と言ったか（日本人年代別）（数値は回答総数に対する各回答の割合%）[1.1.1.s-2]

図表のように、「抗議」の割合は年齢が高くなるほど増えている。ビデオではぶつかった方が若い女性であり、その人物と年齢差がある人ほど、「抗議」という強い対応をしやすいくということであろうか。在日日本人で「抗議」が多いのは、年齢の高い人が多いためかもしれない。このほか、全体的傾向として、女性は男性に比べ「抗議」より「叫び」の方が多い。コメントで、性別によって対応が異なると述べた人が何人かいた。ほかに滞在期間との関係も調べたが、特にはっきりした関連性は見い出せなかった。このような場面では、相手との年齢差や性別が行動に関係しているようである。

次に、在日外国人の回答傾向を図表Ⅱ-1-22a、図表Ⅱ-1-22bに示す。図表には参考のため、日本人全体の数字も合わせて示しておく。

図表Ⅱ-1-22a 自分だったら何と言ったか（在日外国人と日本人）（数字は人数）[1.1.1.s-2]

	無言	叫び	抗議	謝罪	安否	回答総数	無調査	被調査者数
在日ブラジル人	16	4	9	0	2	31	1	32
在日フランス人	14	4	12	0	0	30	0	30
在日アメリカ人	13	4	4	9	0	30	0	30
在日韓国人	17	5	7	2	1	32	0	32
在日ベトナム人	17	1	1	3	1	23	9	32
外国人計	77	18	33	14	4	146	10	156
日本人計	113	60	67	1	1	242	17	259



図表Ⅱ-1-22b 自分だったら何と言ったか（在日外国人と日本人）（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.1.1.s-2]

全体としては、各グループとも日本人の回答傾向とよく似ていると言えよう。その中で、在日ベトナム人で「無言」が多いこと、在日アメリカ人で「謝罪」が多いこと、在日フランス人で「抗議」が多いことが目に付く。在日ベトナム人の場合、前に述べたように滞在期間が短く、日本語力が不足している人も多い。日本語力がいないため、やむを得ず「無言」になったのではないかと予想される。実際、コメントの中にも日本語でうまく言えないから何も言わない、というコメントがあった。外国人についても、年齢との関係を調べたところ、日本人と同様、年輩の人ほど「抗議」の割合が多くなる。しかし、外国人の場合、

40 代以上の人の数が少ないので、年齢が関係すると現時点では断定できない。また、滞在年数との関係を見ると、「謝罪」のタイプの回答は滞在年数3年未満の人がほとんどであった（14人中12人が3年未満）。「謝罪」は日本生活に慣れるにしたがって消えていくのであろうか。

Ⅱ.1.1.6. ぶつかられた側の抗議行動について（ビデオ見て）

次に、最初無音で示したぶつかり場面の映像を、今度は音声付きで見せ、いくつかの質問を行った。まず、調査票の該当部分を示す。

1.2.0. では、次に、同じ場面を、今度は声を付けて見ていただきます。日本でのことだと思って考えて下さい。

1.2.1. <日本人調査>こちらの人（ぶつかられた人）が、何と言ったか、ちょっと繰り返して言ってみて下さい。

<外国人調査>こちらの人（ぶつかられた人）は「危ナイワネー、気ヲツケテヨ」と言っていましたね。そのように聞こえましたか。

SUB-1. ぶつかられた人の身振りで、なにか気になったことがありましたか？

SUB-2. ぶつかられた人は、どんな表情をして言葉をかけましたか？

1.2.3. ぶつかられた（着物の方の）人のことをうかがいます。

SUB-1 この人の（相手の謝る前）の話し方について、どんな印象を受けましたか？

(1) ①この場面での言葉として、まずは適当だろう。

②この場面での言葉としては、不適当だ。

SUB.SUB. どんな点が不適当だと思いますか？

(2) ①この人はどんな性格の人に見えますか？

1.2.3.SUB-2 [日本のこと]

この場面での言葉として、言い過ぎだと思いますか？ それとも、言葉が足りないと思いますか？

SUB.SUB. どんな点に過不足がありますか？

1.2.3.SUB-3

もし、あなたがこの場面でこのような言い方をされたとしたら、どんな気持ちになりそうですか？

SUB.SUB. ① 不愉快。 → どんな点が不愉快ですか？

② なんとか我慢できそう。

<外国人調査のみ> ③ 言われても当然だ。

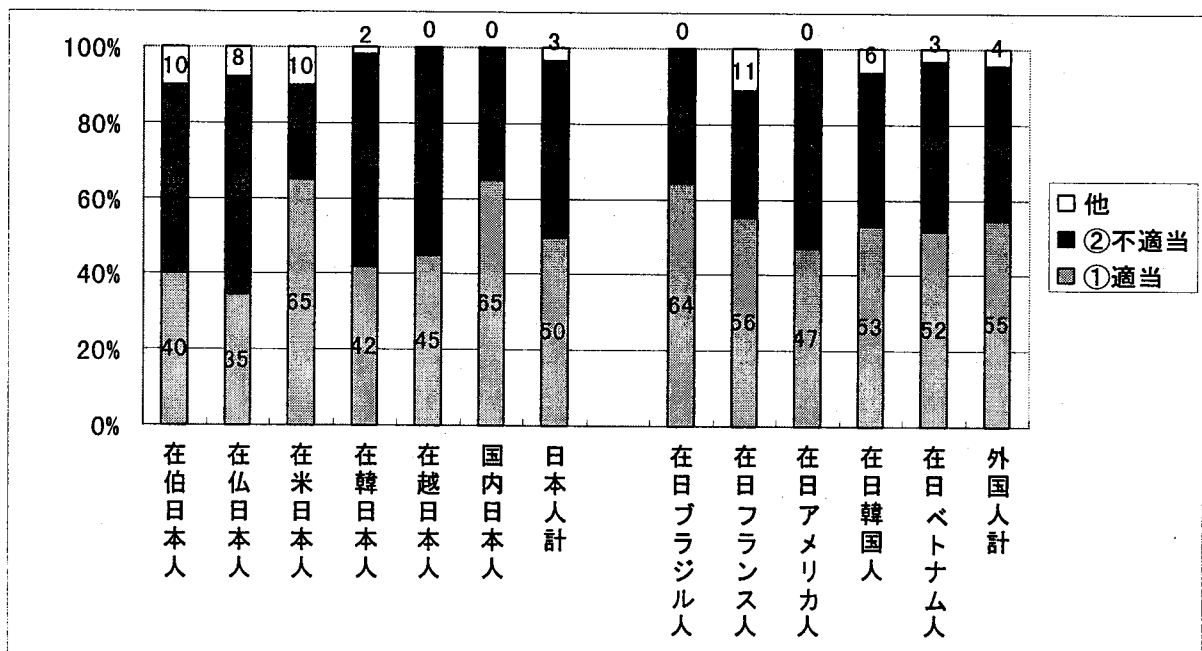
SUB.SUB. どんな言葉を返しそうですか？

Ⅱ.1.1.6.1. 話し方は適当だと思うか

上記の質問票のうち、まず、ぶつかられた人の話し方について尋ねた[1.2.3]の質問について、その結果を見ていきたい。ぶつかられた女性の話し方が適当か否かを尋ねた結果は図表Ⅱ-1-23a、図表Ⅱ-1-23b のようになった。

図表Ⅱ-1-23a ぶつかられた女性の話し方は適当か（数字は人数）[1.2.3.s-1(1)]

	①適当	②不適当	他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	8	10	2	20	10	30
在仏日本人	9	15	2	26	5	31
在米日本人	13	5	2	20	18	38
在韓日本人	21	28	1	50	0	50
在越日本人	18	22	0	40	6	46
国内日本人	39	21	0	60	4	64
日本人計	108	101	7	216	43	259
在日ブラジル人	18	10	0	28	4	32
在日フランス人	15	9	3	27	3	30
在日アメリカ人	8	9	0	17	13	30
在日韓国人	17	13	2	32	0	32
在日ベトナム人	16	14	1	31	1	32
外国人計	74	55	6	135	21	156

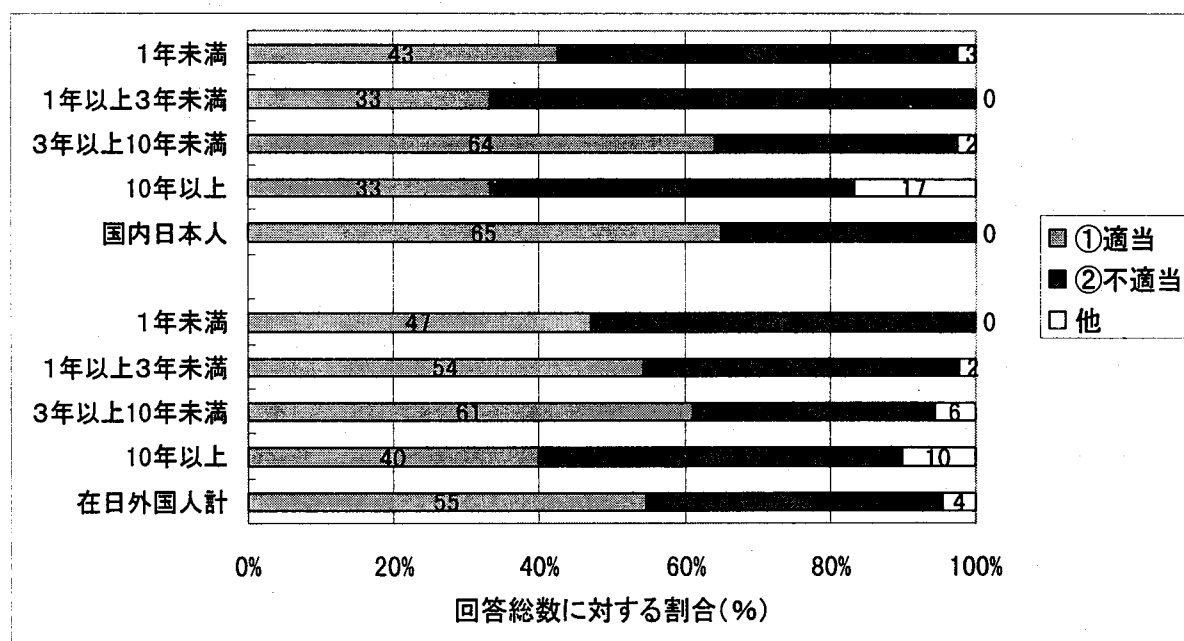


図表Ⅱ-1-23b ぶつかられた女性の話し方は適当か（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.2.3.s-1(1)]

まず、日本人各グループでは、国内日本人に比べ在外日本人（在米日本人を除く）は「不適当」という回答が多い。在日外国人では在日ブラジル人で「適当」が多いものの、各グループの差はそれほど大きくない。在日アメリカ人は「適当」が少ない方であり、在米日本人でなぜ他の在外日本人より「適当」という回答が多いのか、はっきりした原因はわからない。国内、在外をまとめた日本人全体について、性別、年代による違いがないかを分析したが、両要素ともはっきりした傾向を示さなかった。そこで、在外日本人の現住国での滞在年数と[1.2.3.s-1(1)]の回答との関連を調べてみた。その結果が図表Ⅱ-1-24a、図表Ⅱ-1-24bである。図表では、在日外国人についての結果も合わせて示している。

図表Ⅱ-1-24a ぶつかられた女性の話し方は適当か（滞在年数との関係）（数字は人数）[1.2.3.s-1(1)]

滞在年数		①適当	②不適当	他	回答総数	無調査	被調査者数
在外日本人	1年未満	17	22	1	40	5	45
	1年以上 3年未満	14	28	0	42	7	49
	3年以上 10年未満	27	14	1	42	14	56
	10年以上	10	15	5	30	13	43
	国内日本人	39	21	0	60	4	64
在日外国人	1年未満	8	9	0	17	2	19
	1年以上 3年未満	25	20	1	46	8	54
	3年以上 10年未満	33	18	3	54	9	63
	10年以上	4	5	1	10	1	11
	在日外国人計	74	55	6	135	21	156



図表Ⅱ-1-24b ぶつかられた女性の話し方は適当か（滞在年数との関係）（数字は回答総数に対する各回答の割合％）[1.2.3.s-1(1)]

図表を見るとわかるように、在外日本人は滞在年数によって回答傾向に違いがある。「1年未満」「3年未満」までは「不適当」が多いのに対し、「3年以上10年未満」になると「適当」が多くなる。「3年以上10年未満」の人の回答傾向は国内日本人と極めてよく似ている。国内日本人の数字を日本人の平均と見るのは危険かもしれないが、今回の結果から見ると、外国に住み始めた当初は、日本に住んでいるときより厳しい評価を下す傾向があるのかもしれない。3年程度たつと、生活もある程度落ち着いてきて、日本での感覚

を回復するということなのだろうか。一方、在日外国人の数字を見ると、在日外国人の場合も「3年以上 10 年未満」で「適当」が最も多くなる。これは、先ほどの在外日本人の傾向と似ている。外国生活当初は他人の行動に対する評価基準が厳しくなる、という傾向は民族などとは関係なく、ある程度普遍的に起こることなのかもしれない。この問題は、もう少し詳しく調べる必要があろう。なお、図表では日本人、外国人とも、「10 年以上」の人でまた「不適当」という回答が増えている。ということは、さらに外国に長くいると、評価基準がまた変わってくるのかもしれない。しかしながら、日本人の場合、「10 年以上」の人はブラジル 21 人、アメリカ 11 人に対し、韓国 1 人、ベトナム 0 人と該当者が特定の国に偏っていること、外国人の場合は該当者の人数が少ないこと(11 人)から、そういう判断は早計かと思う。もう一つ、今回の被調査者は全体的に見て、若い年代ほど滞在期間が短く、年齢が増すほど滞在期間が長くなる傾向がある。したがって、今回の結果を単純に滞在期間と関係が深いと結論づけることはできない。ここでは、滞在期間が関係する可能性がある」と指摘するに止めたい。

なお、この質問で「不適当」と答えた人には、どういう点が適当でないかも尋ねた。その結果を図表Ⅱ-1-25 に示す。

図表Ⅱ-1-25 ぶつかられた女性の話し方でどんな点が不適当か（複数回答）（数字は人数）[1.2.3.s-1(1)s]

	言葉	表情	身振り	言い方	タイミング	不適当と回答した人
在伯日本人	7	0	0	2	0	10
在仏日本人	8	2	3	0	0	15
在米日本人	2	0	0	2	0	5
在韓日本人	21	4	3	2	2	28
在越日本人	10	0	1	1	2	22
国内日本人	13	9	6	4	1	21
日本人計	61	15	13	11	5	101
在日ブラジル人	8	2	0	0	2	10
在日フランス人	6	0	1	0	1	9
在日アメリカ人	4	1	4	0	1	9
在日韓国人	11	7	0	0	0	13
在日ベトナム人	2	4	0	5	0	14
在日外国人計	31	14	5	5	4	55

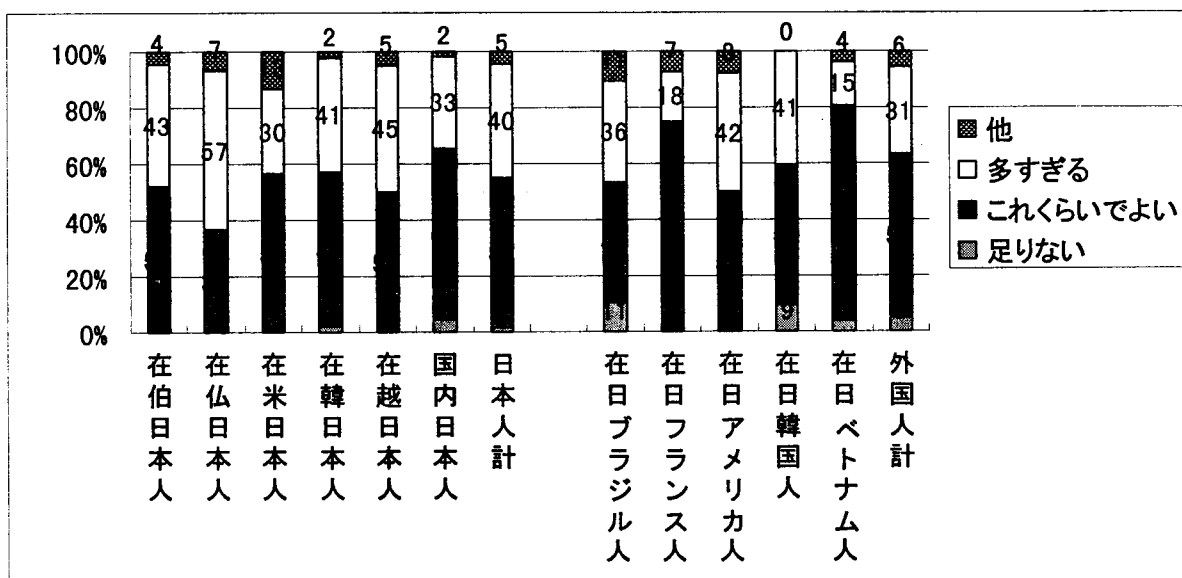
図表のように、不適当な点として「言葉」をあげた人が、日本人、外国人ともに圧倒的に多く、それ以外では「表情」、「身振り」、「言い方(イントネーションなど)」、「言うタイミング」があがっている。国による違いがもっと出てくると予想したが、回答数が少なくははっきりした傾向は見いだせなかった。少し目に付くのは、在日韓国人で「表情」をあげた人が少し多いことと、在日ベトナム人では「言葉」をあげた人が少なかったことぐらいである。

Ⅱ.1.1.6.2. 言葉の量は適当か

調査では次に、ぶつかった女性の言葉の量について適当か否か、つまり言い過ぎかもっと言うべきかを尋ねた([1.2.3.s-2])。図表Ⅱ-1-26a、図表Ⅱ-1-26b がその回答結果である。

図表Ⅱ-1-26a ぶつかられた女性の言葉の量は適当か（数字は人数）[1.2.3.s-2]

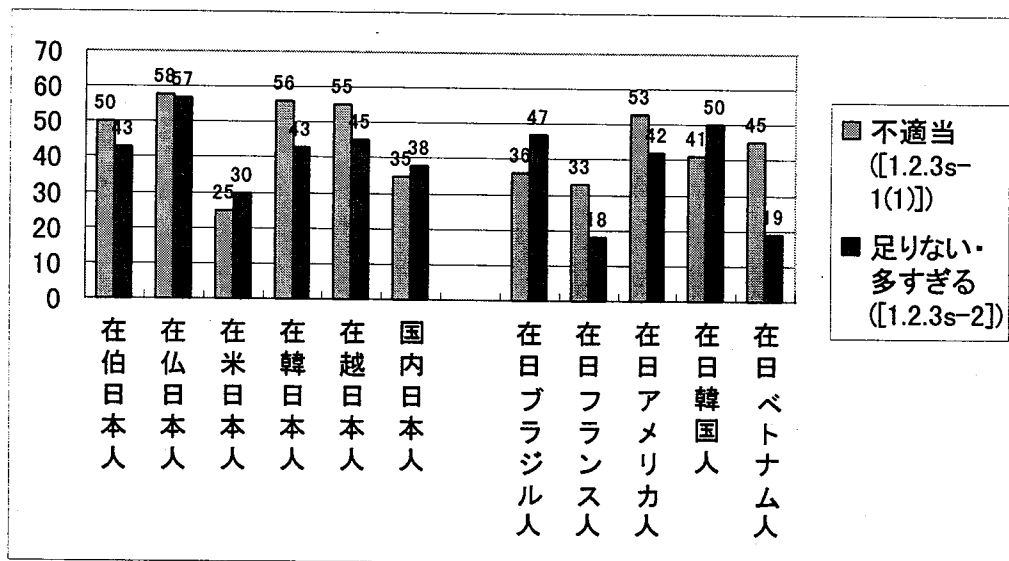
	足りない	これくらい でよい	多すぎる	他	回答総 数	無調査	被調査 者数
在伯日本人	0	12	10	1	23	7	30
在仏日本人	0	11	17	2	30	1	31
在米日本人	0	17	9	4	30	8	38
在韓日本人	1	27	20	1	49	1	50
在越日本人	0	20	18	2	40	6	46
国内日本人	3	39	21	1	64	0	64
日本人計	4	126	95	11	236	23	259
在日ブラジル人	3	12	10	3	28	4	32
在日フランス人	0	21	5	2	28	2	30
在日アメリカ人	0	13	11	2	26	4	30
在日韓国人	3	16	13	0	32	0	32
在日ベトナム人	1	20	4	1	26	6	32
外国人計	7	82	43	8	140	16	156



図表Ⅱ-1-26b ぶつかられた女性の言葉の量は適当か（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.2.3.s-2]

日本人の場合、言葉自体の適当さを尋ねた[1.2.3.s-1(1)]での回答傾向とよく似ている。「多すぎる」という回答が、国内日本人と在米日本人で同じくらい、そのほかのグループではそれより少し多い。ただし、[1.2.3.s-1(1)]と比べると、日本人各グループの違いは小さい。在仏日本人で「多すぎる」が目立つくらいである。いっぽう、在日外国人では、[1.2.3.s-1(1)]の場合より各グループ間の差が大きい。在日フランス人と在日ベトナム人では「多すぎる」がかなり少なく「これくらいでよい」が7割を越えている。これに対し、在日アメリカ人と在日韓国人では「多すぎる」がかなり多くなっている。[1.2.3.s-1(1)]での

回答傾向とこの質問での回答傾向を比べるため、図表Ⅱ-1-27 では、[1.2.3.s-1(1)]での「不適当」という回答とこの質問での「足りない」「多すぎる」という回答の割合を比較してみた。



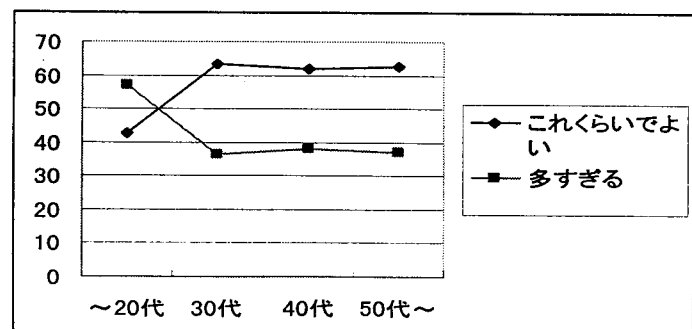
図表Ⅱ-1-27 ぶつかられた女性の話し方についての回答([1.2.3.s-1(1)])と言葉の量についての回答([1.2.3.s-2]) (数字は回答総数に対する各回答の割合%)

在韓日本人、在越日本人や在日フランス人、在日アメリカ人、在日ベトナム人では、「不適当」という回答の割合に比べ、「足りない・多すぎる」という回答の割合が少ない。ということは、一部の人は言葉の量以外の理由で「不適当」と感じたということであろう。特に在日フランス人と在日ベトナム人では差が大きいので、言葉の量以外に「不適当」と感じる理由があったと考えられる。在日ベトナム人については、不適当な原因をまとめた図表Ⅱ-1-25 を見ても、「言葉」より「表情」や「言い方」を指摘する人が多く、この結果と一致している。しかし、在日フランス人では、図表Ⅱ-1-25 を見ても言葉の量以外に何を不適当と感じたのか、はっきりしない。

ところで、日本人全体の回答についていくつかの要素について分析したところ、年齢による差が比較的是っきりしていることがわかった。図表Ⅱ-1-28a、図表Ⅱ-1-28b は日本人全体の回答と年齢の関係を示したものである。

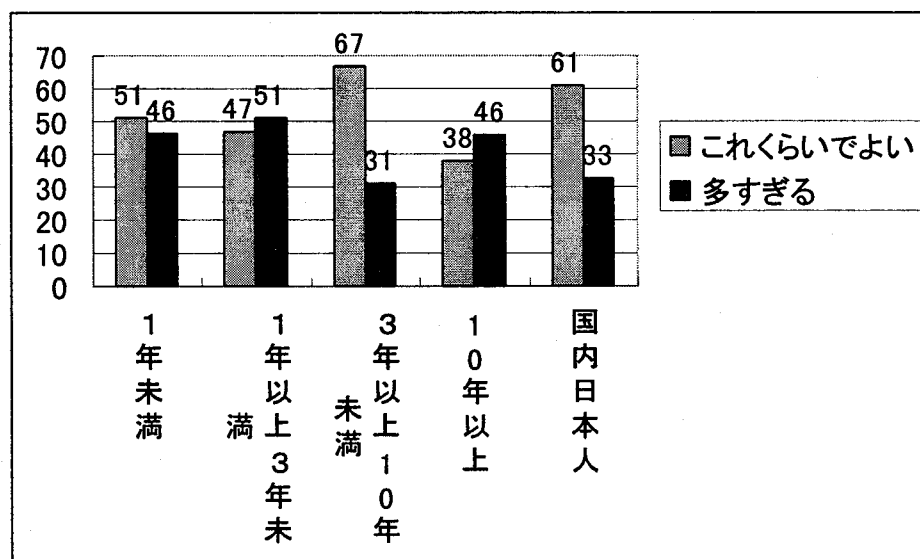
図表Ⅱ-1-28a ぶつかられた女性の言葉の量は適当か(日本人調査、年齢との関係)(数字は人数) [1.2.3.s-2]

	これくらいでよい	多すぎる
～20代	27	36
30代	47	27
40代	26	16
50代～	27	16



図表Ⅱ-1-28b ぶつかられた女性の言葉の量は適当か(日本人調査、年齢との関係)(数値は回答総数に対する各回答の割合%) [1.2.3.s-2]

図表のように、20代の方は「多すぎる」と感じる人が多いのに対し、30代以上の方は「このくらいでよい」と思う人が多い。ぶつかった女性が20代ぐらいの人であったため、20代の被調査者はぶつかった女性の立場に立って考えたのかもしれない。こういう判断を求める場合、登場人物のどちらにアイデンティティを感じるかによって、回答結果も変わってくるものと考えられる。今回の場合は、登場人物が若い女性と年輩の女性だったので、年齢がアイデンティティを感じる重要な要素になったのではなかろうか。日本人に関しては、[1.1.1.s-2]で自分だったら何と言うかを尋ねた結果においても年齢が回答を左右する大きな要素であった。一方で、ぶつかられた女性の話し方について適当不適當を尋ねた[1.2.3.s-1(1)]の質問では、年齢による差がはっきりしなかった。むしろ外国での滞在期間による差が目立った。そこで、言葉の量についての質問でも滞在期間との関係を探ってみた。図表Ⅱ-1-29は「このくらいでよい」「多すぎる」という回答と滞在期間の関係を示したものである。



図表Ⅱ-1-29 ぶつかられた女性の言葉の量は適当か（在外日本人の滞在期間との関係）（数字は回答総数に対する各回答の割合％）[1.2.3.s-2]

女性の話し方について適当不適當を尋ねた場合と同様、「3年から10年未満」の人と「国内日本人」は似かよった回答傾向であり、それ以外の滞在年数の人たちは、「多すぎる」という回答が多くなっている。女性の話し方についての回答と同様、回答において滞在期間がどの程度の影響を与えているのか、単に年齢との関係で付随的に現れた結果なのか、現段階では判断しがたい。

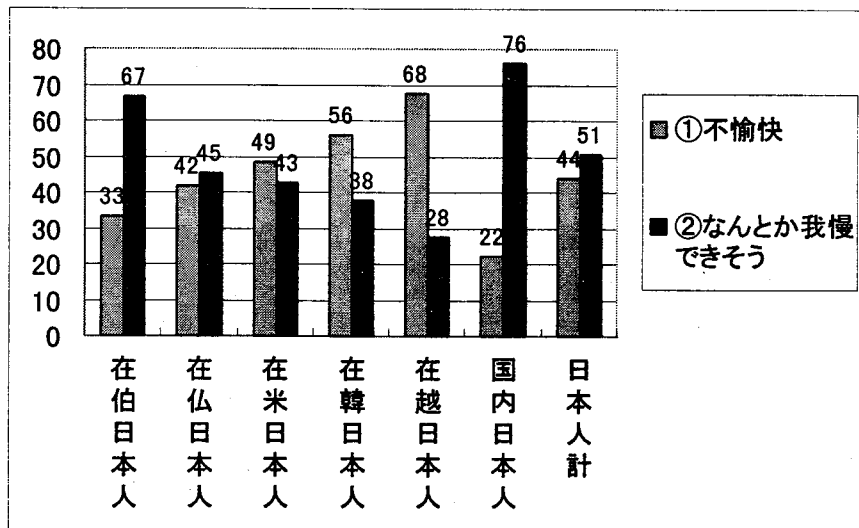
なお、言葉の量に関する質問では、在日外国人の場合、年齢による回答の差は見られなかった。グループ別に見れば、年齢による差が見られる可能性はあるが、今回の調査では人数が少なくグループ別に年齢との関係を見ることは難しかった。

Ⅱ.1.1.6.3. 自分がこう言われたらどう思うか

調査ではさらに、被調査者に対し、自分がこのような言い方をされたらどのように思うかを尋ねた。その回答の全体結果を図表Ⅱ-1-30a、日本人調査の結果を図表Ⅱ-1-30bに示す。この質問はまず自由回答を求め、その回答が調査票の選択肢に該当しないときはさらに選択肢を口頭で言う形で行った。選択肢は「①不愉快」「②何とか我慢できそう」「③言われても当然だ」であったが、③の選択肢は外国人調査の調査票のみにあり、日本人調査の調査票にはない。これは日本人調査で③に該当する回答がかなりあったため、外国人調査で③を追加したためである。したがって、日本人調査と外国人調査の結果を同一基準で判断することはできない。

図表Ⅱ-1-30a 自分がこう言われたらどう思うか（数字は人数）[1.2.3.s-3]

	①不愉快	②なんとか我慢できそう	③言われて当然だ	その他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	8	16	-	0	24	6	30
在仏日本人	13	14	-	4	31	0	31
在米日本人	17	15	-	3	35	3	38
在韓日本人	28	19	-	3	50	0	50
在越日本人	27	11	-	2	40	6	46
国内日本人	14	48	-	1	63	1	64
日本人計	107	123	-	13	243	16	259
在日ブラジル人	9	7	12	4	32	0	32
在日フランス人	6	11	6	7	30	0	30
在日アメリカ人	9	7	12	1	29	1	30
在日韓国人	14	7	11	0	32	0	32
在日ベトナム人	8	6	13	2	29	3	32
外国人計	46	38	54	14	152	4	156

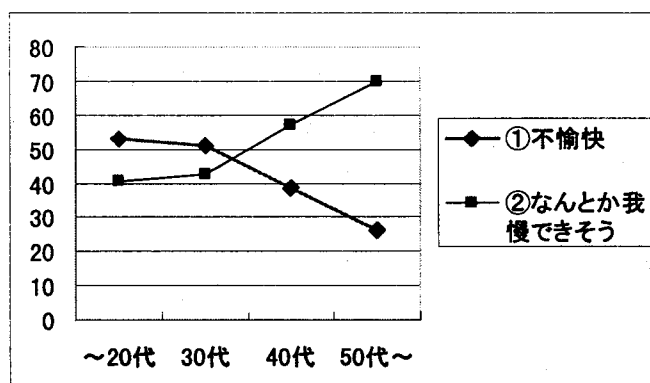


図表Ⅱ-1-30b 自分がこう言われたらどう思うか（日本人調査）（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.2.3.s-3]

日本人の回答を見ると、在外日本人は在伯日本人を除き、「①不愉快」が多い、あるいは①と「②何とか我慢できそう」が同じくらいの割合である。これに対し、国内日本人は②がかなり多い。在外日本人でも若い人が多い在韓日本人、在越日本人で①の割合が多く、年輩の人が多い在伯日本人と国内日本人で②の割合が多いことから、この結果は年齢と関係があるのではと考えた。図表Ⅱ-1-31a、図表Ⅱ-1-31b は、日本人の回答と年齢との関係を示したものである。

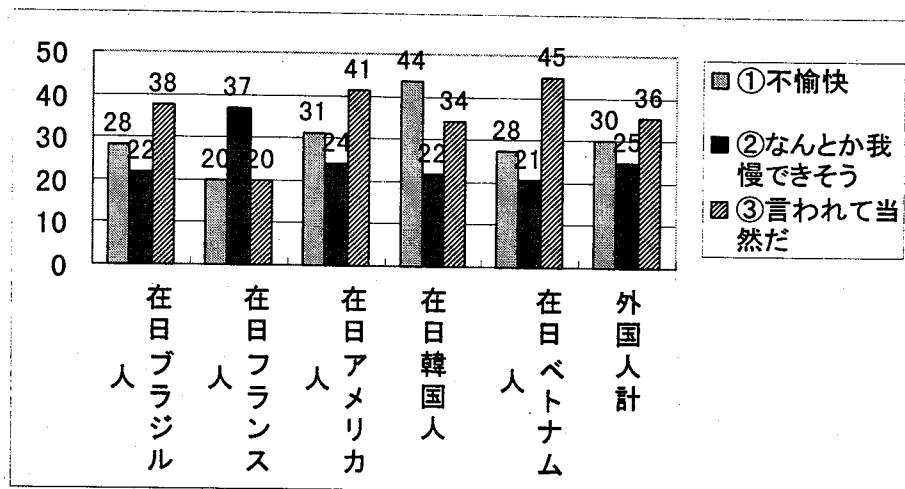
図表Ⅱ-1-31a 自分がこう言われたらどう思うか（日本人調査、年齢との関係）
（数字は人数）[1.2.3.s-3]

	①不愉快	②なんとか我慢できそう	③言われて当然だ	その他	回答総数	無調査	被調査者数
～20代	34	26	—	4	64	6	70
30代	41	34	—	5	80	4	84
40代	19	28	—	2	49	4	53
50代～	13	35	—	2	50	2	52



図表Ⅱ-1-31b 自分がこう言われたらどう思うか（日本人調査、年齢との関係）
（数値は回答総数に対する各回答の割合）[1.2.3.s-3]

図表のように、年齢が高くなるほど、特に50代以上になると②が急激に増える。つまり、年齢が高くなるほど相手の態度に納得し反発を感じない人が増えるということである。これは、「自分だったら何と言ったか」という質問の回答（[1.1.1.s-2]）（図表Ⅱ-1-21a、図表Ⅱ-1-21b）の場合とよく似ている。[1.1.1.s-2]の回答では年齢が高くなるほど「抗議する」という回答が多くなった。「自分が言われたらどう思うか」という質問と、「自分だったら何と言ったか」という質問は、どちらも自分の行動を問う質問である。そういう場合、年齢の高い人、特に50代以上の人では、ぶつかられた年輩の女性の立場に立った回答が多くなる。これに対し、50代以上の人ほどはっきりした傾向ではないが、若い人はぶつかった女性に味方する回答をしている。一方、事態を第3者的に見た「話し方は適当か」（[1.2.3.s-1(1)]）「言葉の量は適当か」（[1.2.3.s-2]）という質問では、年齢による差は少し少なくなっている。このような結果を見ると、第3者的な質問より当事者としての質問の方が、被調査者の反応の差がはっきりすると言えよう。さらに、今回の調査では、ビデオ映像によって登場人物をより具体的にとらえることができ、その分登場人物のどちらの側に味方するかがはっきり出やすかったのかもしれない。映像を使った調査が最も効果的な部分を考える上で、今回の結果は検討する価値がありそうである。



図表Ⅱ-1-32 自分がこう言われたらどう思うか（外国人調査）（数字は回答総数に対する割合％）[1.2.3.s-3]

在日外国人の結果をグラフにすると、図表Ⅱ-1-32 のようになる。在日フランス人だけが他のグループと異なり、②が最も多い。それ以外のグループでは在日ベトナム人で③の割合が高いことが目に付く。

Ⅱ.1.1.6.4. 同じ場面が対照国（現住国／母国）で起こったら

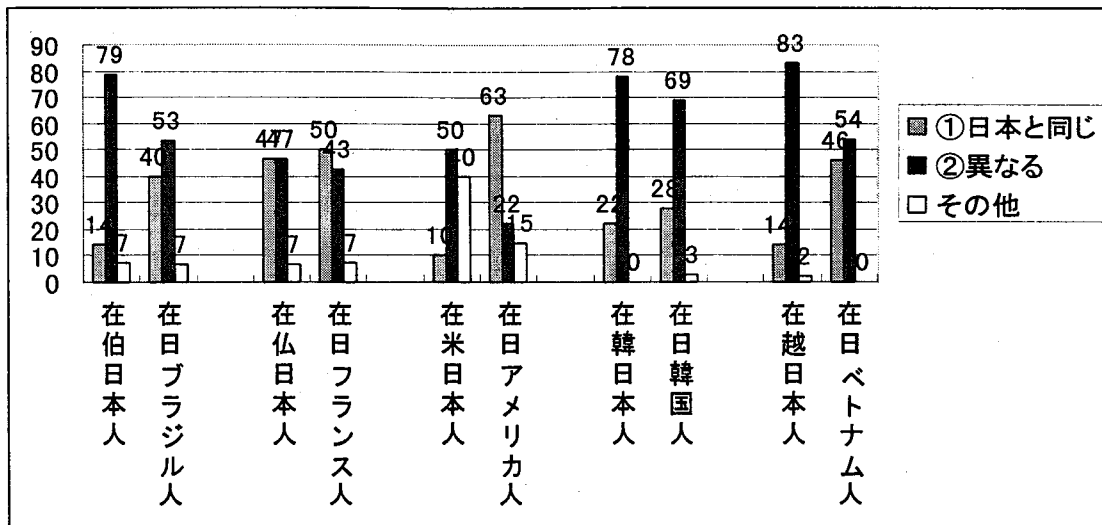
さらに調査では、ビデオと同じ場面が対照国で起った場合のことを尋ねた。調査票の該当部分は以下のようなものである。また、回答結果を図表Ⅱ-1-33a、図表Ⅱ-1-33b に示す。

1.2.6. 同じ場面が、もし【この国】／【母国】で起きたとしたら、ぶつかられた方が相手の謝ってくる前になにか言うとして、この日本の映像と違った言葉を言うと思いますか？それとも、大体同じような言い方でしょうか？

SUB.SUB.そのような言葉の返し方は日本と比べてどんな印象を持ちますか？

図表Ⅱ-1-33a 対照国で起った場合ぶつかられた女性の言い方は（数字は人数）[1.2.6]

	① 日本と同じ	② 異なる	その他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	4	22	2	28	2	30
在日ブラジル人	12	16	2	30	2	32
在仏日本人	14	14	2	30	1	31
在日フランス人	14	12	2	28	2	30
在米日本人	3	15	12	30	8	38
在日アメリカ人	17	6	4	27	3	30
在韓日本人	11	39	0	50	0	50
在日韓国人	9	22	1	32	0	32
在越日本人	6	35	1	42	4	46
在日ベトナム人	12	14	0	26	6	32



図表Ⅱ-1-33b 対照国で起った場合ぶつかられた女性の言い方は（数字は回答総数に対する各回答の割合%）[1.2.6]

図表を見てわかるように、在外日本人と現住国の人の意見が一致しているのは韓国だけである。韓国ではどちらも「日本と異なる」という意見が多数である。それだけ、ぶつかりの場面での行動パターンが日本とはっきり違っているということなのかもしれない。そのほかの国は、日本人と現住国の人と意見が一致しない（ブラジル、アメリカ、ベトナム）か、両者ともはっきりした回答傾向が見られない（フランス）。意見が一致しない国の場合は、いずれも現住国の人より日本人に「日本と異なる」と見る人が多い。ブラジルとベトナムでは現住国の人もどちらかといえば「異なる」と見る人が多いので、おおよその傾向は似ていると見るべきかもしれない。これに対し、アメリカでは現住国の人は「日本と同じ」と見る人が多く、日本人の回答とは逆の回答傾向になっている。在米日本人では「その他」の回答が多く、その内容は「ぶつかった方が謝るのでこういう状況が起こらない」というコメントが多かった。質問ではぶつかられた方が先に何か言うとして、という前提をつけたが、そのような状況が起こりにくい国では、回答が難しかったかもしれない。

対照国で起こった場合、日本とどのような点が異なるか、被調査者から様々なコメントがあった。比較的多かったコメントは、次のようなものである。

- 在伯日本人 — 言葉が激しい、怒って言う
- 在日ブラジル人 — もっと激しい言葉で言う
- 在仏日本人 — 言葉の数が多い、身振り大げさだ、非難はしない
- 在日フランス人 — 怒る、言葉もそれに応じた言い方になる
- 在米日本人 — ぶつかった方が謝るのでこういう状況が起こらない、相手による、意地悪な言い方をしない、ストレートに言う
- 在日アメリカ人 — 何も言わない、ビデオに出てくるような年輩の女性なら言うが、自分なら言わない
- 在韓日本人 — 言い方が激しい・きつい、怒る、声大きい、驚きの声をあげる
- 在日韓国人 — 言葉言わないか言うときつくなる、まず驚きの言葉を言う
- 在越日本人 — 言い方がきつい・荒っぽい、強く言う、非難する、驚くだけである
- 在日ベトナム人 — 何も言わない、相手が先に謝る

このコメントを見ると、ブラジル、フランス、韓国は日本人と現住国の人のコメントがよく似ているのに対し、アメリカ、ベトナムはあまり共通点がない。この点については、どうしてこのような違いが生じるのか、興味深いところである。

日本と異なる点について全体的に見ると、どのグループでも表現、言い方（きつい、激しいなど）、言葉の数など言葉に関する違いを挙げる人が多かった。他に特徴的と思われる点は、在仏日本人・在日フランス人と在韓日本人・在日韓国人において、他のグループに比べ「表情」の違いをあげる人がいたこと、在米日本人・在日アメリカ人と在越日本人・在日ベトナム人では表情・身振りについてコメントした人が一人もいなかったこと、以上の2点である。

Ⅱ.1.1.7. 身体接触の受け止め方

最後に身体接触の受け止め方について、一般的な印象と実際に暮らしている中での経験を尋ねた。質問票の該当部分を示す。

1.3. 【この国】／【母国】と日本を比べて考えて見て下さい。

一般的にいて、通りすがりの人など他人の体と自分の体が触れるということについての受け止め方（感じ方）は、【この国】／【母国】と日本とで違うと思いますか？ それともあまり違いませんか？

①あまり変わらない ②日本の方が気にする ③【この国】／【母国】の方が気にする

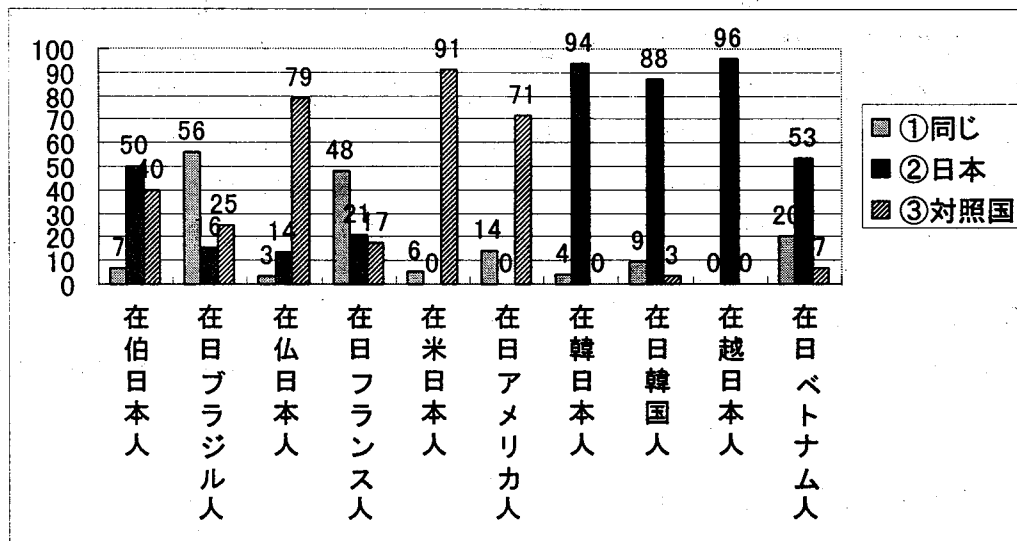
1.4. 通りすがりの他人と体が触れた（ぶつかった）時の経験で、【この国】／【母国】と日本とで、何か違うと感じた経験、あるいは、何かトラブルのような経験はありますか？

Ⅱ.1.1.7.1. 対照国（現住国／母国）と日本で違いがあるか

図表Ⅱ-1-34a, 図表Ⅱ-1-34b は、他人との身体接触について、日本と対照国との違いを尋ねた結果である。

図表Ⅱ-1-34a 対照国と日本どちらが身体接触を気にするか（数字は人数）[1.3]

	①同じ	②日本	③対照国	その他	回答総数	無調査	被調査者数
在伯日本人	2	15	12	1	30	0	30
在日ブラジル人	18	5	8	1	32	0	32
在仏日本人	1	4	23	1	29	2	31
在日フランス人	14	6	5	4	29	1	30
在米日本人	2	0	32	1	35	3	38
在日アメリカ人	4	0	20	4	28	2	30
在韓日本人	2	47	0	1	50	0	50
在日韓国人	3	28	1	0	32	0	32
在越日本人	0	44	0	2	46	0	46
在日ベトナム人	6	16	2	6	30	2	32



図表Ⅱ-1-34b 対照国と日本どちらが身体接触を気にするか（数字は回答総数に対する各回答の割合％）[1.3]

在外日本人と在日外国人が同じ回答傾向を示すのは、アメリカ、韓国、さらにベトナムもほぼ同じと言ってよいであろう。韓国については、同じ状況が対照国で起こった場合を尋ねた[1.2.6]の質問でも、日本人、韓国人ともに同じ意見であった。身体接触について、日本の方が気にするという認識は在韓日本人、在日韓国人のあいだではほぼ共通の認識と言ってもよいかもしれない。ただし、韓国でぶつかったときの応答の仕方については、かなり認識の差がある。日本人は韓国人が謝らないという印象持っているのに対し、韓国人自身はそういうときには謝ると思っている。このような違いが生じる理由としては、「ぶつかった」と思う程度が日本人と韓国人では差があるためかもしれない（同じチームの石井恵理子の指摘）。つまり、「ぶつかった」とき謝るという基本線は同じだが、ぶつかりの衝撃の程度やぶつかりと見なす状況（たとえば、雑踏の中での接触はぶつかりとは見なさない、など）が日本と韓国で異なるため、日本人と韓国人の回答傾向に差が生じた、と考えるわけである。この考えは、現段階では仮説にすぎないが、今後検証していく価値があるのではないかと。同様のことがベトナムについても言えるのかもしれない。在越日本人と在日ベトナム人の回答傾向の違いは、韓国の場合と似ている部分が多く、同じような検証が必要だろう。なお、謝罪については、本報告書の他の章でも扱われているので、その結果も参照願いたい。

次にアメリカについてであるが、[1.2.6]では意見が一致しなかった在米日本人、在日アメリカ人がこの質問に対しては一致している。全体的な傾向としては、アメリカの方が気にするという認識で一致しているが、個々の状況についての見方では、日本人とアメリカ人で若干の差があると言えよう。これまでの回答結果から見て、在米日本人は在日アメリカ人が思う以上に、「アメリカ人は身体接触に対して敏感で、ぶつかったらすぐに謝る」という意識が強いようである。

残るブラジルとフランスについては、この質問以外でも回答が分散する傾向があった。ここで扱ったぶつかりに対する応答という行動については、ブラジル人、あるいはフランス人はこうだという特徴がないと見るべきなのかもしれない。ブラジル、フランスはとも

に多民族の国であり、被調査者たちがどういう人たちを知っているかによって、回答も違って来るであろう。実際、ブラジルでの調査において、「ブラジルは階級社会で階級によってかなり違う」というコメントをよく聞いた。ただし、多民族でもアメリカのように、あるはっきりした傾向を示す国もあり、多民族の国だからどうだとすぐに結論づけるのは危険である。焦点を当てた行動によって、多様性が生じやすい部分と、そうでない部分があるのかもしれない。行動の仕方にどのような要素が絡んでいるのか、今回の調査結果をもう一度総合的に見てみる必要があるだろう。

この[1.3]の質問に対しては、様々なコメントが得られた。コメントの内容については、次章で触れられているので、ここでは省略する。同様に、最後の身体接触に関する経験についても、次章を参照願いたい。

II.1.1.8. まとめと残された問題

本章で述べたことを簡単にまとめておく。

1. 謝罪した相手に対する応答について

- ①母国より現住国の方がぞんざいな応答をするときは、母国の応答を維持する傾向がある（在仏日本人、在越日本人、在日ブラジル人、在日アメリカ人）。ただし、在韓日本人は現住国で母国よりぞんざいな応答をする傾向がある。
- ②母国より現住国の方が丁寧な応答をするときには、現住国の応答の影響を受け、応答が丁寧になる傾向がある（在米日本人、在日韓国人）。
- ③応答をするとき気にする点は、母国と現住国であまり大きな差がない。

2. ぶつかられたときの行動について

- ①自分の行動を問う質問、あるいは登場人物の行動を評価する質問では、日本人の回答は被調査者の年齢と関係している可能性がある。特に、自分の行動を問う質問では、自分と年齢的に近い登場人物の立場に立つ傾向がはっきりしている。

最後に、この調査を実施、分析する中で感じた問題点をいくつか述べておきたい。

(1) 価値観の影響

第1は、すでに本報告書で西原が触れているように、ユニバーサルな規範意識をめぐる問題である。場面1はぶつかったときの謝罪と抗議について調べている。こういう場面では、日本だけでなくかなりの地域で、ぶつかった場合丁寧な謝罪をする方がよい、謝罪に対しては丁寧に応答する方がよいという考えがある。そういうある種ユニバーサルな規範意識を伴う行動であることが、被調査者にも微かな影響を与えた可能性がある。たとえば、韓国やベトナムでは多少ぶつかっても何もいわずともよいという雰囲気がある。そういう地域の人たちは、謝罪した方がよい、あるいは謝罪に対して応答した方がよいというユニバーサルな広がりを持つ規範意識に対して、自分たちの行動を回答しにくい立場になる。一方、韓国やベトナムにいる日本人は、そういう規範意識を前面に出して韓国やベトナムの人の行動を非難する形になってしまう。言い換えれば、在韓日本人や在越日本人は攻める立場、在日韓国人や在日ベトナム人は攻められる立場に置かれてしまうのである。そういう中では、攻める方の回答は、謝罪や応答をしないことを強調する回答へ、攻められる方の回答は、謝罪や応答をすることを強調する回答へ傾きやすいのではないかと考える。在韓日本人や在越日本人の調査では、場面1の部分は大変活発なコメントがあった。俗な言い方をすれば、大変盛り上がった部分であった。一方、在日韓国人や在日ベトナム人の

調査では、質問に答えにくそうな印象があり、韓国人被調査者は弁明にも似たコメントをすることがよくあった。韓国人やベトナム人にとっては、場面1の質問は極めて居心地の悪いものであったかもしれない。

今回の調査のような、言語行動に関する調査では、今述べたような規範意識、価値観を伴う行動を扱うことが多い。調査を国際的に行う場合、第1に、西原が述べているような、日本での規範意識をユニバーサルなものと思いこむことの危険さを認識する必要がある。第2に、ある規範意識が実際にユニバーサルな広がりを持つ場合、その規範意識を強く持たないグループは回答しにくい立場に置かれることを認識する必要がある。

(2) リストの項目の書き方

今回の調査では、口頭での回答のほか、適宜いくつかの選択肢を書いたリストを見せ、その中から選択肢を選んでもらった。例えば次のようなものである。

- | | |
|-----|-------------------------------|
| リスト | ①とくに、何もしない。 |
| | ②会釈するくらいで、言葉には出さない。 |
| | ③「いいえ」くらいの簡単な言葉を返す。 |
| | ④「いいえ、どういたしまして」など、少し丁寧な言葉を返す。 |
| | ⑤その他 |

このようなリストを見て、被調査者の中には、「表現としては○番だが、気持ちとしては○番くらいだ」とコメントした人が何人かいた。こちらとしてはその表現を発する際の気持ちを述べてほしかったのであり、表現は参考のつもりであったのだが、表現そのものに注目して答えた人もかなりいたようである。現住国での行動を答える際にも、本来の丁寧さより、現地の言葉を日本語に訳してどれに当たるか考えた人もいたようである。直訳すれば丁寧でも、実際にはそれほど丁寧でない表現もあるわけで、こちらが意図した回答を十分引き出せなかった可能性がある。多言語を対象とする場合には、選択肢の中に具体的な表現を出さない方がよいのかもしれない。

(3) 被調査者の属性

今回の調査では、フェイスシートに被調査者に関するいろいろな情報を書き込んでもらったが、分析をする過程で情報が不十分な点もあった。外国人の場合は日本語の能力、日本人の場合は現住国の言語の能力に関する情報がほとんどなく、そういう観点からの分析はできなかった。

ここまでは、調査全体について残された問題を指摘してきた。最後に、場面1を分析した本稿について、残された問題を述べておく。

本稿では、もっぱら回答を類型化し数的に処理する方法で分析を進めてきた。今回の調査は、調査数が少ない上に自由回答が多いので、統計的な処理をするには適当ではないが、回答のおおよその傾向を見るためにこのような方法を採用した。このような方法でもある程度、回答の傾向を示すことができたと考える。しかしながら、たとえば、相手が謝ってきたときどう応答するかという質問に対し、男性なら②で女性なら③というように、使い分ける条件を述べた人もいた。本稿では、そういう回答は②と③の複数回答として処理しただけで、使い分けの条件についての情報は生かされていない。今回の調査は、単なるアンケート調査ではなく、面接で比較的自由にコメントしてもらった。この調査の利点は、そういう付随的なコメントを得られる点にあると思う。時間的な点で、本稿では今回の調

査で得られたそういうコメントについてほとんど分析できなかった。

また、本稿では、年齢、滞在期間、接触度と回答との関係を探ったが、そのほかの要素、たとえば職業や使用言語との関係などについては、まだ分析できていない。コメントの分析とともに、今後は、他の要素についての分析も行わなければならない。

このほか、場面1の質問項目で生越が分析を行うべき項目のうち、以下の項目については時間的な問題で分析が行えなかった。

- ・ [1.1.1.(3)] ぶつかられた方が先に何か言うとしたらどんな感じか。
- ・ [1.1.2.(3)] この国／日本でぶつかられた方が先に言うとしたらどんな感じか。
- ・ [1.2.1.s-1] ぶつかられた方が話したときの身振りで気になることは何か。
- ・ [1.2.1.s-2] ぶつかられた方が話したとき、どんな表情をしていたか。
- ・ [1.2.3.s-1] ぶつかられた方の話し方にどんな印象を持ったか。
- ・ [1.2.3.s-1(2)] ぶつかられた方の人とはどんな性格の人だと思うか。

<注>

1. 本稿での「在日韓国人」は、韓国生まれで、留学や仕事などのため比較的最近日本に居住するようになった韓国人、いわゆるニューカマーの韓国人を指す。
2. グループで調査している場合、被調査者が明確な回答をしないとき、時間的に一人一人に回答を確認できないことがある。本稿では、調査を行わなかった人のほかに、調査をしたけれども、明確な回答が得られなかった人、つまり無回答の人も合わせて「無調査」としている。
3. 本来、折れ線グラフは連続的なつながりを持つ項目について用いられる。その点、ここで挙がっている「在伯日本人」「在仏日本人」といった項目は、そのような連続的なつながりがなく、折れ線グラフで示すべき項目ではない。しかしながら、この場合は、選択肢の数が多く、項目相互、および選択肢相互の関係を示すには折れ線グラフが最も効果的であった。このほかにも、本稿では項目が連続的なつながりを持たない場合でも、結果の全体的な様相を示すのに効果的な場合、あえて折れ線グラフを用いた。

<参考文献>

- 西原鈴子ほか 1994 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム』 平成5年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 尾崎喜光 1999 『日本語社会における言語行動の多様性』 新プロ「日本語」研究班2 国立国語研究所チーム研究報告書